

## 下地皆愛方言のアクセント体系に関する予備的報告\*

セリック・ケナン

国立国語研究所・kcelik@ninjal.ac.jp

キーワード：宮古語、下地皆愛方言、アクセント体系、複合アクセント法則

本稿では、調査結果に基づき、南琉球宮古語<sup>しもじみなあい</sup>下地皆愛方言のアクセント体系に関する予備的報告を行う。具体的に次の3点を明らかにする。すなわち、第一に、宮古語の他の方言と同様に各アクセント型の実現を正しく記述するために「韻律語」という韻律的単位を想定する必要がある。第二に、単純名詞の環境では2つの対立するパターンしか観察されないのにもかかわらず、複合アクセント法則が適用される、生産的に作られる複合語においては3つの対立するパターンが現れる。その結果、皆愛方言のアクセント体系は3種類のアクセント型が区別されると分析しなければならない。なお、各名詞のアクセント型の所属を明らかにするための新しい調査パラダイムを提示する。第三に、各アクセント型の音韻的な解釈を提案する。第四に、名詞に関する所属語彙の情報を付録の形で提示する。

### 1 はじめに

南琉球宮古語に所属する多良間方言が2型ではなく、3型のアクセント体系を持つという発見(松森 2010)以来、宮古諸方言のアクセント体系に関する記述的研究はすさまじい速さで成果を挙げてきた。特に、宮古諸方言のアクセント体系を正しく記述するために、文節とモーラ(あるいは音節)の間に位置し、「韻律語」と名付けられた韻律的単位が必要であることが分かっ  
てから(五十嵐 2015, 2016b)、その新しい理論的な枠組みを駆使して数多くの研究成果が蓄積されてきた(例えば Matsumori (2019)、セリック (2020a,c) 等)。

その中で各方言における「韻律語」の実態が今もなお議論の対象となっている。従来の研究は韻律語の統一的な定義を想定した上で、宮古語の複数の方言のアクセント体系を捉えようとしてきた(五十嵐 2016b)。しかし、個別方言の記述を深めたごく最近での研究では、韻律語の韻律的な位置付けが方言ごとに異なる可能性があるという指摘が見られる(セリック・青井 印刷中)。よって、個別の方言を対象とした精密な記述を通して、各方言の内部的な基準を明らかにし、韻律語の実態を吟味する必要がある。

さらに、宮古諸方言のアクセント体系のもう一つの重要な特徴として広範囲に渡るアクセント型の中和現象がある。「中和現象」とは、音韻的に対立する2つのアクセント型が特定の環境

\* 本研究は JSPS 科研費 19K13174、20H01259 の助成を受けたものです。本稿の執筆にあたり、山岡翔氏から有益なコメントを多くいただきました。特に各アクセント型の音韻的な解釈は山岡氏の指摘によるところが多くて、ここで感謝の意を表します。なお、いつも調査に協力してくださる長間三夫氏と友利京子氏に心より感謝を申し上げます。

において同じ実現を示し、区別されなくなる現象のことを指し、日本本土諸方言を含めて多くの方言で観察される（東京方言の「鼻」と「花」の単独の発音などはその例である）。このようにアクセント型の中和は決して珍しい現象ではないが、宮古諸方言で観察される中和は広範囲に渡って起きているばかりでなく、環境によって中和するアクセント型の組み合わせが変わったりするなど、非常に複雑な現象となっている。

しかしその中でも極端な例が報告されている。与那覇方言は3つのアクセント型（a型・b型・c型）が対立すると分析されている（松森 2013）が、想定されているa型とb型の中和範囲が異様に広い。つまり、3つのアクセント型の対立は複合語の前部要素の位置でしか観察されない（ただし、b型とc型の2拍名詞はこの環境で中和する）。これに対して、単純名詞のどの環境でもa型とb型は全く同じ実現を示しており、完全に中和している。言い換えると、a型とb型の単純名詞（名詞語根）は単純名詞としてどの環境でも同じ音調を示し、全く区別されないものの、複合語のパターンを元に異なるアクセント型に所属していると分析されている。

このような分析がなされているのは「複合アクセント法則」、すなわち複合語全体のアクセントが前部要素のアクセント型によって決まるという法則がその方言において成立していると考えられているからである。確かに「複合アクセント法則」が成立していれば、複合語全体の音調を前部要素の特性として解釈することができる。そして、複合語において3種類の異なる音調が観察されるならば、その必然の結果として、これらの複合語における前部要素はお互い対立する3種類のアクセント型に分かれるということになる。

この議論は筋がよく通っていると言える。しかし、与那覇方言についてデータがほぼ公表されていないこともあり、この方言が3型のアクセント体系を持っているという決定的な証明には至っていない。先行研究の問題点として、第一に、前提となる「複合アクセント法則」は独立の根拠で実証されていない、第二に、調べられた複合語の数が明らかにされていないため、なされている一般化の妥当性については評価しづらい<sup>1</sup>、第三に、調べられた複合語は生産的な過程によって生成された複合語ではなく、「水瓶」のように（琉球の伝統的な農業社会において）日常的な物を指すなど、語彙的に登録されている可能性のある複合語である、の3点が挙げられる。つまり、異なる分析として、語彙的な複合語はその音調と共にレキシコンに登録されていると想定することができ、その場合、複合語で観察される3つの対立するパターンは前部要素の特性としてではなく、複合語自体の特徴として解釈することができる。その結果、単純名詞においてアクセント型の3項対立を認める必要性がなくなる。どの分析が妥当であるかを決定するためには、生産的に形成される複合語のみを対象とした上で、健全な一般化ができるように十分なデータを収集する必要がある。

以上のことを踏まえて、本研究では宮古語の個別方言である下地皆愛方言を取り上げ、その方言のアクセント体系の精密な記述を目指しつつ予備的な報告を行う。特に、皆愛方言に焦点を当てるのは与那覇方言と同じ問題があるからである。つまり、単純名詞は2つのパターンシ

<sup>1</sup> 松森 (2013) はデータの数を記しておらず、調べられたアクセント資料も公表していないので、どれぐらいのデータに基づいて一般化がなされているのかを知ることができない。その結果、提案されている分析に不透明性が生じてしまい、結論が正しくてもその妥当性が評価しにくくなっている。

か観察されないのに対して、複合語は3つのパターンが観察される(セリック 2020a)。従って、本稿では、皆愛方言に即した調査パラダイムを考案・駆使しながら、そのアクセント体系に関する予備的な分析を提示する。

## 2 背景

### 2.1 皆愛方言

皆愛方言は南琉球宮古語の一方言であり、宮古島の下地地域に位置する皆愛集落で伝統的に話されている。皆愛集落は、平良方面からの一家に加えて上地集落と与那覇集落からの移住者で近世末期にできたという(畑 1983)。セリック (2018:97) で指摘されているように、皆愛方言は上地方言に近いと、上地集落からの移住者の方が多く、彼らが話していた方言が今日の皆愛方言のベースになったと推測することができる。

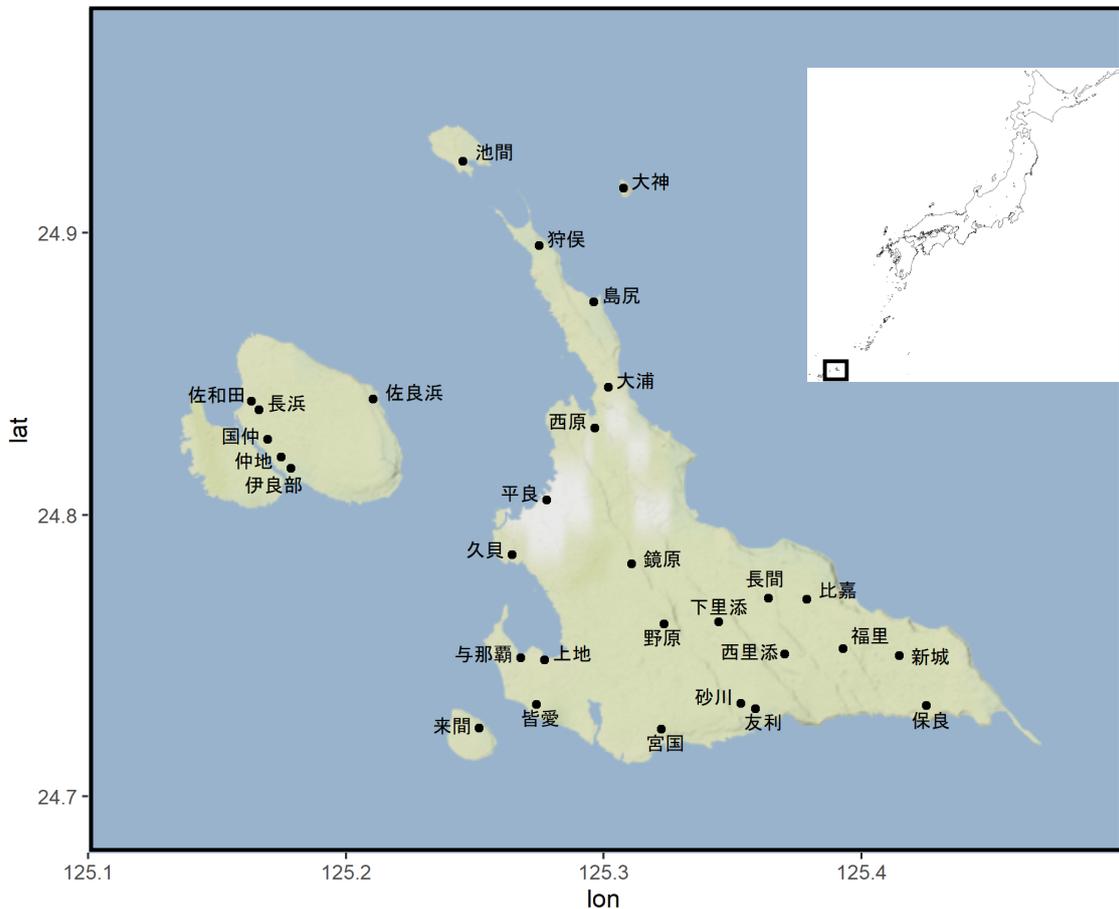


図1 宮古諸島の位置と宮古島の集落

皆愛方言の主な先行研究は文法の簡略記述・テキスト・語彙集を収録したセリック (2018) とアクセント体系の予備的結果を報告したセリック (2020a:187-198) がある。音素体系を (1) に挙げる。

- (1) 皆愛方言の音素体系<sup>2</sup>(セリック 2018:98)  
 子音: p, b, m, f, v, t, d, n, ts, dz, s, z, r, j, k, g, h  
 母音: i, ɨ, u, a  
 長母音: i:, ɨ:, u:, a:, o:

音調(高音調・低音調)付与の単位は拍である。音調付与の対象となる分節音は母音、音節の核を成しうる m、n、v、f、s の子音と二重子音の前半である。アクセント体系に関する予備的結果については次節で述べる。

## 2.2 皆愛方言のアクセント体系に関する予備的結果

セリック (2020a) は 2 拍から 4 拍の単純名詞を対象に「単独発話」<sup>3</sup>、「X=INC=FOC ...」、「X=GEN 話 =ACC ...」、「X=DIR=INC ...」(X は対象語) の 4 つの環境における音調を調べた結果、少なくとも 2 つのアクセント型が対立することを示した。(2)に示すように<sup>4</sup>、ピッチの下降の位置によってアクセント型の明瞭な対立が観察される。(2)においてピッチの下降がより早い位置で実現する型は「c 型」、それに比べてピッチの下降が 1 拍分遅い型は「ab 型」と名付けられる。

- (2) a. ka:=n]kai=mai ... 「井戸へも...」(ab 型)  
 b. ka:=n]kai=mai ... 「皮へも...」(ab 型)  
 c. naka = ]nkai=mai ... 「中へも...」(c 型)  
 セリック (2020a:190) より

このように、単純名詞において少なくとも 2 つのアクセント型が対立することが明らかにされたが、十分な数の粹文について調べられてこなかったため、各アクセント型の特徴については一般化がなされていない。また、皆愛方言における韻律語という韻律的単位の必要性やその実態についても明らかにされていない。

次に、2 つの構成要素から成る複合語の音調に関する結果が報告されている。複合語は単純名詞と違って、3 つの異なる音調が観察される (3)。「平板型」の複合語はそれ自体を含む文節にピッチの下降が実現せず、高く発音されている。これに対して、「下降 2 型」と「下降 1 型」の複合語はそれ自体を含む文節にピッチの下降が実現する。具体的に言うと、下降 2 型では後部

<sup>2</sup> 本稿で採用している表記については次の点に注意されたい。破摩子音は 2 文字で表記しているが、1 つの音素である。ただし、これに対して、[ç, ʒ, tç, dz] と 1 文字で書いている音声はそれぞれ /sj, zj, tsj, dzj/ のように子音とグライドの連続として解釈される。長母音は母音の連続としてみなさないため、V: の表記を採用している。なお、/v/ が短子音である場合 [v] として実現し、それを w で表記している。

<sup>3</sup> 単独発話では、文末の下降イントネーションが被さるため、アクセント型の中和が非単独環境に比べより広範囲に起きる。アクセント型の対立を主眼に置いている本稿では、単独発話の音調は扱わない。

<sup>4</sup> 本稿で掲げる例においては、アクセント型を上付きの小文字で、接語境界を「=」、複合語境界を「+」、接辞境界を「-」で表し、ピッチの局所的な下降と上昇を「[ ]」の記号で示す。なお、接続形、つまり、対象の語が入っている文節の後に述語などが続くアクセント資料は対象の語が含まれる文節以外の部分を省略し、「...」の記号を添える。

要素のところ、下降1型では前部要素のところピッチの下降が実現する。

- (3) a. 平板型 : kadzi + fukɔ = nu panas = ]su ... 「台風の話...」  
 b. 下降2型 : sani + wa: = ]nu panas = su ... 「種豚の話...」  
 c. 下降1型 : ka:]ra + ja: = nu panas = su ... 「瓦葺の家の話を...」  
 セリック (2020a:195) より

ここで特に注目されるのは平板型と下降2型の複合語の前部要素である。なぜならば、(3ab)に挙げられている複合語の前部要素は同じab型に属しているからである。つまり、単純名詞の環境では同じab型と認定されながらも、語によっては複合語の前部要素になると2つの異なる音調が観察される。このような分裂をどのように解釈するべきかが問題となる。

セリック (2020a) ではこの問題に対して答えを与えていないが、41語の複合語を調べた結果、「平板型」と「下降2型」の分裂の分布が琉球祖語で再建される前部要素の系列<sup>5</sup>(服部 1959, 1979a,b)(大山 1962)(松森 1998, 2000a,b, 2010, 2012)(五十嵐 2016a, 2018)に沿っている傾向があることを示している。具体的に言うと、A系列とB系列の単純名詞は同じab型の音調で実現しており、完全に合流しているように見える一方、A系列の前部要素を含む複合語は平板型、B系列の前部要素を含む複合語は下降2型になる傾向が認められる(セリック 2020a:196-198)。

このように、複合語に見られる「平板型」と「下降2型」の対立が明らかに古い言語状態の保持であると解釈できる。しかし、共時的な観点ではこの対立をどのように分析できるかは必ずしも自明ではない。例えば、皆愛方言では「複合アクセント法則」(上野 2012:50)が成立していれば、複合語全体の音調が前部要素のアクセント型で決まるということになるので、平板型と下降2型の対立を前部要素のアクセント型の対立(a型・b型)として分析できる。しかし、これに対して、複合語の中で語彙化した語があると想定することもできよう。つまり、複合語そのものが音調の情報と共に語彙目録に登録されているという言語状況も考えられる。前者の解釈を採用した場合、つまり、単純名詞レベルでa型とb型の対立が指定されると分析した場合、「単純名詞の全環境」という非常に広い中和環境を想定する必要性が生じる。そして、当然の結果として、a型とb型の所属の習得が「複合語の前部要素」という非常に狭い環境に基づいていなければならない。

以上、先行研究の予備的結果について述べたが、未解決の問題として、A. 韻律語の単位の認定、B. 共時的に対立するアクセント型の数、C. 各アクセント型の実現およびその音韻的な解釈、の3点の問題が挙げられる。本稿では、各アクセント型の実現および韻律語の認定を4節で、アクセント型の数を5節で、そして、アクセント型の音韻的な解釈を6節で扱う。

<sup>5</sup> 「系列」は日本語のアクセント史における「類」と同じ概念である。その定義は次の通りである。「現代諸方言と文献資料(とりわけ、平安末期の漢和辞典である『類聚名義抄』日本語アクセントの再建の声点表示)における単語アクセントの対応に基づいて祖体系に立てられるアクセントの対立グループを「類」と呼ぶが、その所属語彙(その対応を実現している単語)が「類別語彙」である」上野(2006:3-4)。

### 3 データ

本稿で使うデータは皆愛方言の母語話者である友利京子氏（昭和 23 年生）の協力の下でエリシテーション調査の形で得られた。これまで、4666 点のアクセント資料を収集している<sup>6</sup>。データの詳細は各節で述べる。

皆愛方言のアクセント資料について 2 つの注意点がある。第一に、皆愛方言では、発話頭が高く始まるため、発話頭における高いピッチの記号は記入しない。第二に、文節の末尾拍に句境界の高音調（以下「句末高音調」）が挿入されることが多い<sup>7</sup>。この高音調は先行する拍が低ければ、通常の高さで実現する (4a)。しかし、先行する拍が既に高ければ、より高い値で実現する傾向が見られる (4b)。本稿のアクセント資料では、文節の末尾拍に置かれる句境界音調を次のように表す。通常の高さで実現する句境界音調を「 $\acute{\circ}$ 」、で、通常より高い値で実現する句末高音調を「 $\acute{\circ}$ 」でマークする。なお、アクセント型の実現を「[ ]」の記号で記述しきれない音調は音声的な実現に即して国際音声記号を使用する。

- (4) a.  $\acute{a}v\acute{v}\acute{a} + w\acute{a}: = n\acute{u} = d\acute{u} \dots$  「脂 + 豚 = NOM = FOC ...」  
 b.  $\acute{a}k\acute{a} + m\acute{a}j = n\acute{u} = d\acute{u} \dots$  「赤 + 米 = NOM = FOC ...」

= $\acute{d}\acute{u}$  琉球祖語の系列情報は「日琉語類別語彙（19 年 05 月 17 日版）」（五十嵐 2016a）による。系列は上付きの大文字で示す。

## 4 皆愛方言における単純名詞のアクセント型の実現と韻律語の認定

### 4.1 宮古諸方言における「韻律語」の単位

宮古諸方言（多良間、池間、与那覇、狩俣<sup>かりまた</sup>など）におけるアクセント型の実現を正しく記述するためには「韻律語」（Prosodic Word）という韻律範疇を想定する必要がある（松森 2013, 2015）<sup>8</sup>（五十嵐 2015, 2016b）（Igarashi et al. 2018）。これまでの研究はこの単位が 2 モーラ以上の形態素によって形成される（言い換えれば 1 モーラの形態素は韻律語を形成しない）としている点で一致している（松森 2014, 青井 2016, 五十嵐 2015, 2016b）。五十嵐 (2016b) はさらに、多良間方言と池間方言を対照した研究において、韻律語を「2 モーラ以上の語根・接語が写像される韻律的単位」と定義している。以下、3 つのアクセント型（a 型・b 型・c 型）が区別される多良間方言の例を紹介しながら、韻律語の定義を簡単に説明していく。

多良間方言の c 型名詞の音調を (5) に挙げる。c 型名詞のアクセントは発話頭の表層の実現においてピッチの局所的な下降によって実現する。しかし、環境によってピッチの下降の位置が変動する。2 拍の接語が付いた環境や、複合語の前部要素になる場合、ピッチの下降が名詞語

<sup>6</sup> その他に同じ皆愛方言の母語話者である長間三夫氏（昭和 30 年生）の協力も得ており、これまで 1763 点のアクセント資料を収録している。二人の話者の間ではアクセント型の実現が一致していることが確認できたが、友利京子氏の語彙の方がより保守的な所属を示している。本稿では、アクセント資料がより豊富にあり、また、通時的な所属がより安定している友利京子氏のデータのみを使う。

<sup>7</sup> 上地方言についても同様の現象が指摘されている（Matsumori 2019:62）。池間西原方言も同様の現象が確認できている（調査ノート）。

<sup>8</sup> 松森 (2013) では「音調領域」と仮に呼ばれていた。

根の末尾拍の直前に実現する (5ab)。これに対して、1 拍接語または 1 拍接語の連鎖が付く環境では、ピッチの下降が文節の末尾拍の直前にまで遅れて実現する (5dc)。しかし、1 拍接語の後にさらに 2 拍の接語を付けてみると、ピッチの下降が文節の末尾拍にまで遅れず、1 拍接語の直前に、すなわち、名詞語根の直後に実現する (5e)。

- (5) a. fu]ni<sup>c</sup> = mai ... 「船 = INC ...」  
 b. fu]ni<sup>c</sup> + kuɡɿ = mai ... 「船 + 漕ぎ = INC ...」  
 c. funi<sup>c</sup> = ]nu ... 「船 = NOM ...」  
 d. funi<sup>c</sup> = nu = ]du ... 「船 = NOM = FOC ...」  
 e. funi<sup>c</sup> = ]nu = gami = du ... 「船 = NOM = EMPH = FOC ...」

これらの違いを説明するために、文節の構造に従って異なる韻律構造が想定される。(5ab)の比較から、2 拍以上の接語が名詞語根と同じ韻律的単位を形成すると考えることができる。一方、1 拍接語や 1 拍接語の連鎖が付くとピッチの下降が遅れるため、1 拍接語と 1 拍接語の連鎖が先行の韻律的単位に組み込まれると解釈できる。つまり、(6) に示す韻律構造を想定することができる。例で「( )」でかこってある単位は「韻律語」と呼ばれる単位である。このように韻律語を導入することによって、ピッチの変動の位置を正しく記述することが初めて可能となる。ここでは、多良間方言の c 型の実現について「1 番目の韻律語の末尾拍の直前にピッチの下降が実現する」と一般化ができる。

- (6) a. (fu]ni<sup>c</sup>) = (mai) ... 「船 = INC ...」  
 b. (fu]ni<sup>c</sup>) + (kuɡɿ) = (mai) ... 「船 + 漕ぎ = INC ...」  
 c. (funi<sup>c</sup> = ]nu) ... 「船 = NOM ...」  
 d. (funi<sup>c</sup> = nu = ]du) ... 「船 = NOM = FOC ...」  
 e. (funi<sup>c</sup> = ]nu) = (gami = du) ... 「船 = NOM = EMPH = FOC ...」

そのアクセント体系が記述されたこれまでのどの方言でも韻律語の単位が必要であることが示された (与那覇: 松森 (2013)、池間: 五十嵐 (2016b)、Igarashi et al. (2018)、多良間: 五十嵐 (2015)、狩俣: 松森 (2015)、上地: Matsumori (2019)、水納島: セリック (2020a))。従って、皆愛方言についてもそのアクセント体系を記述する上で韻律語という単位が必要となる可能性が高い。

#### 4.2 単純名詞のアクセント型の実現と韻律語の認定

本節では、単純名詞の音調に関する調査結果を報告し、アクセント型の実現パターンを整理し、韻律語の単位が必要であることを示す。

## 4.2.1 データ

調査内容は次の通りである。2 拍から 4 拍までの名詞のうち、共時的なアクセント型 (ab 型対 c 型) および琉球祖語の系列 (A、B、C) を考慮して (7) に挙げる語を選び出し、これらの音調を (8) に示す枠文で調べた。

- (7) **midzɿ**<sup>ab/A</sup> 「水」、**maɿ**<sup>ab/A</sup> 「米」、**a:**<sup>ab/B</sup> 「粟」、**ami**<sup>ab/B</sup> 「雨」、**ja:**<sup>ab/B</sup> 「家」、**ki:**<sup>ab/B</sup> 「木」、**mm**<sup>ab/B</sup> 「芋」、**mugɿ**<sup>ab/B</sup> 「麦」、**sɿma**<sup>ab/B</sup> 「島」、**im**<sup>c/C</sup> 「海」、**nabi**<sup>c/C</sup> 「鍋」、**tida**<sup>c/C</sup> 「太陽」、**buduɿ**<sup>ab/A</sup> 「踊り」、**tsɿgusɿ**<sup>ab/A</sup> 「膝」、**kagam**<sup>ab/B</sup> 「鏡」、**kamatsɿ**<sup>ab/B</sup> 「頬」、**adan**<sup>c/C</sup> 「阿檀」、**fusuɿ**<sup>c/C</sup> 「葉」、**o:ɡɿ**<sup>c/C</sup> 「扇」、**sanagɿ**<sup>c/C</sup> 「禪」、**mnagu:**<sup>ab/A</sup> 「砂」、**sançin**<sup>ab/A</sup> 「三味線」、**ço:ɡatsɿ**<sup>c/C</sup> 「正月」、**so:min**<sup>c</sup> 「素麺」、

- (8) 対象枠文 (X は対象語)

- a. 1 拍接語・1 拍接語の連鎖

X = nu panas = su ... 「X = GEN 話 = ACC ...」

X = nu = du ... 「X = NOM = FOC ...」

X = ju ... 「X = ACC ...」

X = ju = du ... 「X = ACC = FOC ...」

- b. 2 拍以上の接語・2 拍以上の接語と 1 拍接語の連鎖

X = nkai ... 「X = DIR ...」

X = nkai = du ... 「X = DIR = FOC ...」

X = kara ... 「X = ABL ...」

X = kara = du ... 「X = ABL = FOC ...」

X = mai = du ... 「X = INC = FOC ...」

- c. 2 拍以上の接語の連鎖

X = nkai = mai ... 「X = DIR = INC ...」

X = kara = mai ... 「X = ABL = INC ...」

- d. 1 拍接語と 2 拍接語の連鎖

X = ju = mai ... 「X = ACC = INC ...」

同じアクセント型の所属語彙は同じ実現を示しているため、**midzɿ**<sup>ab/A</sup> 「水」、**mugɿ**<sup>ab/B</sup> 「麦」、**nabi**<sup>c/C</sup> 「鍋」(2 拍名詞)、および **buduɿ**<sup>ab/A</sup> 「踊り」、**kagam**<sup>ab/B</sup> 「鏡」、**o:ɡɿ**<sup>c/C</sup> 「扇」(3 拍名詞) を代表例にして議論を進める。

## 4.2.2 アクセント型の実現

まず、1 拍接語、または 1 拍接語の連鎖が付いた 2 拍名詞の音調を見てみる。2 拍名詞の音調を(9)に示す。いずれの枠文においても 2 つの異なるパターンが観察される。1 つ目のパターンでは、対象語を含む文節がピッチの変動がなく全体に渡って高く発音されている(9abcd-i,ii)<sup>9</sup>。2 つ目のパターンでは、対象語を含む文節の中にピッチの下降が実現する。具体的に言うと、1 拍接語が付くと文節の末尾拍の直前にピッチの下降が実現している(9a-iii)。これに対して、1 拍接語の連鎖が付くと文節の次末尾拍の直前にピッチの下降が実現する(9bd-iii)。対格接語 =ju が付いた枠文では、他とは異なるパターンが観察される(9c-iii)が、この場合、文節の末尾拍に付与される句境界の高音調がアクセント型の実現に干渉していると指摘できる。つまり、3 モーラ句にたいして c 型のアクセント音調と句末高音調を付与するには、音調を担う部分の長さ(モーラ数)が足りないので、ここでは音調が弱化していると考えられる。句境界の高音調が挿入されていない発音だと、(9a-iii)と同じように、文節の末尾拍の直前におけるピッチの下降が観察される(10)。

- (9) a. (i) midz<sub>1</sub> = nu panas = ]su ... 「水<sup>ab/A</sup> = GEN 話 = ACC ...」  
 (ii) mug<sub>1</sub> = nu panas = ]su ... 「麦<sup>ab/B</sup> = GEN 話 = ACC ...」  
 (iii) nabi = ]nu panas = su ... 「鍋<sup>c/C</sup> = GEN 話 = ACC ...」  
 b. (i) midz<sub>1</sub> = nu = du ... 「水<sup>ab/A</sup> = NOM = FOC ...」  
 (ii) mug<sub>1</sub> = nu = du ... 「麦<sup>ab/B</sup> = NOM = FOC ...」  
 (iii) nabi = ]nu = du ... 「鍋<sup>c/c</sup> = NOM = FOC ...」  
 c. (i) mit = tsú ... 「水<sup>ab/A</sup> = ACC ...」  
 (ii) mug<sub>1</sub> = zú ... 「麦<sup>ab/B</sup> = ACC ...」  
 (iii) nábj = ū' ... 「鍋<sup>c/c</sup> = ACC ...」<sup>10</sup>  
 d. (i) mit = tsu = dú ... 「水<sup>ab/A</sup> = ACC = FOC ...」  
 (ii) mug<sub>1</sub> = zu = dú ... 「麦<sup>ab/B</sup> = ACC = FOC ...」  
 (iii) nabj = u]: = dú ... 「鍋<sup>c/c</sup> = ACC = FOC ...」  
 (10) im = ]mu ... 「海<sup>c/C</sup> = ACC ...」

3 拍名詞は 2 拍名詞とほぼ同じパターンを示している(11)。つまり、名詞によって 2 つのパターンが現れており、1 つ目のパターンでは(当該の文節において)ピッチの下降が観察されな

<sup>9</sup> 「X<sup>ab</sup> = GEN 話 = ACC ...」の枠文において後続する文節にピッチの下降が観察されるが、これは対象の名詞とは関係しない現象である。皆愛方言では多良間方言と同様に「X = nu Y」(X の Y)という構造だと、Y のアクセント型とは無関係に Y によって形成される韻律語にアクセント音調が付与される。panas = ]su 「話 = ACC」に観察されるピッチの下降はこのアクセント音調の付与による。なお、以下の議論で分かるように、音韻的には /pana]s = su/ が正しい可能性がある。無声音に低音調があるにしても、その観察ことが難しいため、ここでは一貫して panas = ]su と表記する。

<sup>10</sup> 対格の接語 =ju は短母音終わりの名詞に付くと C<sub>1</sub> = ju > C<sub>1</sub>zu, Ci = ju > Cju:, Ca = ju > Co:, Cu = ju > Cu: のように融合する。ただ、名詞が ts<sub>1</sub>, dz<sub>1</sub>, s<sub>1</sub> や fu に終わる場合、ts<sub>1</sub> = ju > ttsu, dz<sub>1</sub> = ju > ddzu, s<sub>1</sub> = ju > ssu, fu = ju > ffu となり、また、子音終わりの場合は m = ju > mmu, n = ju > nnu, v = ju > vvu となる。

い(11abcd-i,ii)。これに対して、2つ目のパターンではピッチの下降が観察される(11abcd-iii)。ただし、下降の位置に着目すると、2拍名詞とは次の違いがあることが分かる。すなわち、1拍接語が付く環境では、文末の末尾拍の直前ではなく、文節の次末尾拍の直前にピッチが下降する(11ac-iii)。4拍名詞は3拍名詞と全く同じなので、データの提示を省略する。

- (11) a. (i)  $\text{budu}\eta = \text{nu panas} = ]\text{su} \dots$  「踊り<sup>ab/A</sup> = GEN 話 = ACC ...」  
 (ii)  $\text{kagan} = \text{nu panas} = ]\text{su} \dots$  「鏡<sup>ab/B</sup> = GEN 話 = ACC ...」  
 (iii)  $\text{o:}]\text{g}\eta = \text{nu panas} = \text{su} \dots$  「扇<sup>c/C</sup> = GEN 話 = ACC ...」  
 b. (i)  $\text{budu}\eta = \text{nu} = \text{du} \dots$  「踊り<sup>ab/A</sup> = NOM = FOC ...」  
 (ii)  $\text{kagam} = \text{nu} = \text{du} \dots$  「鏡<sup>ab/B</sup> = NOM = FOC ...」  
 (iii)  $\text{o:}]\text{g}\eta = ]\text{nu} = \text{du} \dots$  「扇<sup>c/C</sup> = NOM = FOC ...」  
 c. (i)  $\text{budu}\eta = \text{z}\acute{\text{u}} \dots$  「踊り<sup>ab/A</sup> = ACC ...」  
 (ii)  $\text{kagam} = \text{m}\acute{\text{u}} \dots$  「鏡<sup>ab/B</sup> = ACC ...」  
 (iii)  $\text{o:}]\text{g}\eta = \text{zu} \dots$  「扇<sup>c/C</sup> = ACC ...」  
 d. (i)  $\text{budu}\eta = \text{zu} = \text{d}\acute{\text{u}} \dots$  「踊り<sup>ab/A</sup> = ACC = FOC ...」  
 (ii)  $\text{kagam} = \text{mu} = \text{d}\acute{\text{u}} \dots$  「鏡<sup>ab/B</sup> = ACC = FOC ...」  
 (iii)  $\text{o:}]\text{g}\eta = ]\text{zu} = \text{d}\acute{\text{u}} \dots$  「扇<sup>c/C</sup> = ACC = FOC ...」

次に、2拍以上の接語、または2拍以上の接語と1拍接語の連鎖を含む粹文の音調をしてみる。2拍名詞の音調を(12)に示す。2拍以上の接語が付く全ての環境では、どのアクセント型でもピッチの下降が観察される。= $\text{kara}$ 「ABL」や= $\text{mai}$ 「INC」が付く環境では、ab型とc型の名詞が同じパターンを示しており、文節末の次末尾拍の直前にピッチの下降が実現する(12cde-i,ii,iii)。つまり、この環境ではab型とc型の対立が中和している。しかし、これに対して、= $\text{nkai}$ 「DIR」が付く粹文では、ab型とc型が対立している。具体的に言うと、ab型の名詞は他の粹文と同様に文節末の次末尾拍の直前にピッチの下降が実現する(12ab-i,ii)。一方、c型の名詞は焦点接語の有無とは関係なく、ピッチの下降位置が固定しており、最初に付く= $\text{nkai}$ 「DIR」の直前に実現する(12ab-iii)。

- (12) a. (i)  $\text{midz}\eta = \text{n}]\text{ka}\acute{\text{i}} \dots$  「水<sup>ab/A</sup> = DIR ...」  
 (ii)  $\text{mug}\eta = \text{n}]\text{ka}\acute{\text{i}} \dots$  「麦<sup>ab/B</sup> = DIR ...」  
 (iii)  $\text{nabi} = ]\text{nka}\acute{\text{i}} \dots$  「鍋<sup>c/C</sup> = DIR ...」  
 b. (i)  $\text{midz}\eta = \text{nka}]\text{i} = \text{du} \dots$  「水<sup>ab/A</sup> = DIR = FOC ...」  
 (ii)  $\text{mug}\eta = \text{nka}]\text{i} = \text{d}\acute{\text{u}} \dots$  「麦<sup>ab/B</sup> = DIR = FOC ...」  
 (iii)  $\text{nabi} = ]\text{nkai} = \text{d}\acute{\text{u}} \dots$  「鍋<sup>c/C</sup> = DIR = FOC ...」  
 c. (i)  $\text{midz}\eta = ]\text{kar}\acute{\text{a}} \dots$  「水<sup>ab/A</sup> = ABL ...」  
 (ii)  $\text{mug}\eta = ]\text{kar}\acute{\text{a}} \dots$  「麦<sup>ab/B</sup> = ABL ...」  
 (iii)  $\text{nabi} = ]\text{kar}\acute{\text{a}} \dots$  「鍋<sup>c/C</sup> = ABL ...」  
 d. (i)  $\text{midz}\eta = \text{ka}]\text{ra} = \text{d}\acute{\text{u}} \dots$  「水<sup>ab/A</sup> = ABL = FOC ...」

- |        |                       |                                     |
|--------|-----------------------|-------------------------------------|
| (ii)   | mugɿ = ka]ra = dú ... | 「麦 <sup>ab/B</sup> = ABL = FOC ...」 |
| (iii)  | nabi = ka]ra = dú ... | 「鍋 <sup>c/C</sup> = ABL = FOC ...」  |
| e. (i) | midzɿ = ma]i = dú ... | 「水 <sup>ab/A</sup> = INC = FOC ...」 |
| (ii)   | mugɿ = ma]i = dú ...  | 「麦 <sup>ab/B</sup> = INC = FOC ...」 |
| (iii)  | nabi = ma]i = dú ...  | 「鍋 <sup>c/C</sup> = INC = FOC ...」  |

続いて、(11)と同じ環境における3拍名詞の音調を(13)に示す。まず、2拍名詞と違って、どの辞文においても ab 型と c 型が対立している。次に、ab 型の3拍名詞は2拍名詞と同じパターンを示しており、文節の次末拍の直前にピッチの下降が実現する(13abcde-i,ii)。しかし、これに対して、c 型の3拍名詞は =kara と =mai を含む辞文において c 型の2拍名詞とは異なる音調を示している。つまり、ピッチの下降位置が固定しており、名詞語根の末尾拍の直前に実現している。=nkai を含む辞文も同様である。

- |             |                        |   |
|-------------|------------------------|---|
| (13) a. (i) | buduɿ = n]kaí ...      | 「踊り <sup>ab/A</sup> = DIR ...」              |
| (ii)        | kagam = ]kaí ...       | 「鏡 <sup>ab/B</sup> = DIR ...」 <sup>11</sup> |
| (iii)       | o:]gɿ = nkaí ...       | 「扇 <sup>c/C</sup> = DIR ...」                |
| b. (i)      | buduɿ = nka]i = dú ... | 「踊り <sup>ab/A</sup> = DIR = FOC ...」        |
| (ii)        | kagam = ka]i = dú ...  | 「鏡 <sup>ab/B</sup> = DIR = FOC ...」         |
| (iii)       | o:]gɿ = nkai = dú ...  | 「扇 <sup>c/C</sup> = DIR = FOC ...」          |
| c. (i)      | buduɿ = ]kará ...      | 「踊り <sup>ab/A</sup> = ABL ...」              |
| (ii)        | kagam = ]kará ...      | 「鏡 <sup>ab/B</sup> = ABL ...」               |
| (iii)       | o:]gɿ = kará ...       | 「扇 <sup>c/C</sup> = ABL ...」                |
| d. (i)      | buduɿ = ka]ra = du ... | 「踊り <sup>ab/A</sup> = ABL = FOC ...」        |
| (ii)        | kagam = ka]ra = dú ... | 「鏡 <sup>ab/B</sup> = ABL = FOC ...」         |
| (iii)       | o:]gɿ = kara = dú ...  | 「扇 <sup>c/C</sup> = ABL = FOC ...」          |
| e. (i)      | buduɿ = ma]i = dú ...  | 「踊り <sup>ab/A</sup> = INC = FOC ...」        |
| (ii)        | kagam = ma]i = dú ...  | 「鏡 <sup>ab/B</sup> = INC = FOC ...」         |
| (iii)       | o:]gɿ = mai = dú ...   | 「扇 <sup>c/C</sup> = INC = FOC ...」          |

以上見てきたように、接語によって異なるパターンが観察される。ab 型と c 型が対立する環境 (=nkai を含む辞文) と中和する環境 (=kara や =mai を含む辞文) の違いは一見接語の長さ (3 拍の =nkai 対 2 拍の =kara、=mai) に起因するように見える。しかし、宮古諸方言の =nkai 「DIR」が特殊な韻律的振る舞いを示していることがよく知られている (与那覇: 松森 (2013:76)、多良間: 松森 (2014:15-16) 五十嵐 (2015:11-12)、上地: Matsumori (2019:64)、水納島: セリック (2020a:174)、池間西原: 調査ノート)。つまり、=nkai 「DIR」は 1 拍接語

<sup>11</sup> 鼻音終わりの語に =nkai が付くと、後続の鼻音、つまり接語の最初の分節が削除される。ここでは、基底形 //kagam = nkai// から [kagamkai]、または後続の子音と同化した [kagaŋkai] の表層形になる。

と 2 拍接語の連鎖と同じ振る舞いを示しており、**n** の部分が先行する韻律語に組み込まれるのに対して、残りの **kai** の部分が独自の韻律語を形成する（水納島方言の例を(14)に挙げる）。よって、皆愛方言についても同様である可能性が高く、そのため、=**nkai** の振る舞いを解釈する前に 1 拍接語と 2 拍以上の連鎖の音調を調べる必要がある。

- (14) a. (funi<sup>c</sup> = ]n) = (mai = du) ... 「船水 = DAT = INC = FOC ...」  
 b. (funi<sup>c</sup> = ]n)(ke: = du) ... 「船 = DIR = FOC ...」  
 セリック (2020a:170,174) より

続いて、2 拍以上の接語の連鎖を含む枠文の音調を(15)と(16)に示す。まず、2 拍名詞についてアクセント型の対立及び中和の条件は(12)と同じである。すなわち、最初の接語が =**nkai** であれば、ab 型と c 型が対立し、一方、最初の接語が =**kara** であれば、ab 型と c 型が中和する。従って、アクセント型の対立や中和は最初の接語に起因していることが分かる。続いて、最初の接語が =**nkai** である環境では、=**nkai** が単独に付く環境(12a)と同じ位置にピッチの下降が見られる(15a)。例えば、ab 型の場合は最初の接語である =**nkai** の次末拍の直前にピッチの下降が現れる(15a-i,ii)。このパターンは下降の絶対的な位置からすると(12a)と同じであるものの、相対的に見ると、つまり文節末から数えれば、下降の位置が異なっている。=**kara** を含む枠文についても、同様の違いがあると指摘できる。つまり、(15b)における下降の位置が =**kara** が単独に付く環境(12c)と同じであるが、文節末から数えれば、位置が異なっている。

- (15) a. (i) midzɿ = n]kai = maí ... 「水<sup>ab/A</sup> = DIR = INC ...」  
 (ii) mugɿ = n]kai = maí ... 「麦<sup>ab/B</sup> = DIR = INC ...」  
 (iii) nabi = ]nkai = maí ... 「鍋<sup>c/C</sup> = DIR = INC ...」  
 b. (i) midzɿ = ]kara = maí ... 「水<sup>ab/A</sup> = ABL = INC ...」  
 (ii) mugɿ = ]kara = maí ... 「麦<sup>ab/B</sup> = ABL = INC ...」  
 (iii) nabi = ]kara = maí ... 「鍋<sup>c/C</sup> = ABL = INC ...」  
 (16) a. (i) buduɿ = n]kai = maí ... 「踊<sup>ab/A</sup> = DIR = INC ...」  
 (ii) kagan = ]kai = maí ... 「鏡<sup>ab/B</sup> = DIR = INC ...」  
 (iii) o:]gɿ = nkai = maí ... 「扇<sup>c/C</sup> = DIR = INC ...」  
 b. (i) buduɿ = ]kara = maí ... 「踊<sup>ab/A</sup> = ABL = INC ...」  
 (ii) kagam = ]kara = maí ... 「鏡<sup>ab/B</sup> = ABL = INC ...」  
 (iii) o:]gɿ = kara = maí ... 「扇<sup>c/C</sup> = ABL = INC ...」

最後に 1 拍接語と 2 拍接語の連鎖を含む枠文の音調を見てみよう。まず、2 拍名詞の音調を(17)に示す。この環境では、ab 型と c 型が対立する。ab 型は文節末の次末拍の直前にピッチの下降が実現する(17ab)。これに対して、c 型は文節末の次次末拍(17c)の直前にピッチの下降が見られる。ちなみに、これらのパターンは =**nkai** が付くときと全く同じである。そのため、皆愛方言でも =**nkai** が 1 拍接語と 2 拍接語の連鎖と同じ韻律的構造を持っていると解釈

できる。

- (17) a. mit = tsu = ]maí ... 「水<sup>ab/A</sup> = ACC = INC ...」  
 b. mugl = zu = ]maí ... 「麦<sup>ab/B</sup> = ACC = INC ...」  
 c. nabj = u]: = maí ... 「鍋<sup>c/C</sup> = ACC = INC ...」

次に、3拍名詞の音調を(18)に示す。3拍の ab 型名詞は2拍名詞と同じパターンを示しており、文節の次末拍の直前にピッチの下降が実現する。3拍の c 型名詞は文節末から数えて4つ目の拍の直前にピッチの下降が観察される。

- (18) a. buduŋ = zu = ]maí ... 「踊り<sup>ab/A</sup> = ACC = INC ...」  
 b. kagam = mu = ]maí ... 「鏡<sup>ab/B</sup> = ACC = INC ...」  
 c. o:]gɿ = zu = maí ... 「扇<sup>c/C</sup> = ACC = INC ...」

以上、各梓文におけるアクセント型の実現を見てきたが、次節では韻律的構造の解釈について述べる。

#### 4.2.3 韻律的解釈

単純名詞の実現を表1、表2、表3に纏める<sup>12</sup>。なお、前節で論じたように、=nkai が1拍接語と2拍接語の連鎖と同じ韻律的構造を持つと考えられるため、(韻律的な観点では) =nkai を1拍接語と2拍接語の連鎖として見なして議論を進める。

諸表で確認できるように環境によってピッチの下降の位置がずれることがある。このずれに着目すれば各文節の韻律的構造を明らかにすることができる。以下、3拍・4拍の c 型名詞と ab 型名詞を順番に見ていく。

3拍・4拍の c 型の名詞に2拍の接語が付くと、ピッチの下降の位置が一定しており、名詞語根の末尾拍(3拍名詞)あるいは次末拍(4拍名詞)の前にある(表2(fgh)、表3(fgh))。しかし、1拍接語(4拍名詞)、または1拍接語の連鎖(3拍・4拍名詞)が付くと、ピッチの下降が右へとずれていく(表2(b)、表3(ab))。ただし、1拍接語の後に2拍以上の接語が続くと、下降のずれが阻止される。具体的に言うと、3拍名詞はピッチの下降がずれない(表2(cde))。4拍名詞はピッチの下降が1拍分しかずれない(表3(cde))。

次に、ab 型の名詞の実現を見てみよう。まず、ピッチの下降が現れる環境が必ず2拍の接語を含んでいることが分かる(表1(cdefgh)、表2(cdefgh)、表3(cdefgh))。次に、ピッチの下降がずれる環境を見ると次の通りである。つまり、2拍接語に2拍の接語が付くと、ピッチの下降の位置が最初の2拍接語の次末拍の前で一定しており、2番目の2拍接語がない環境と同じである(表1(cefh)、表2(cefh)、表3(cefh))。しかし、2拍接語の後に1拍の接語が続くと、ピッチの下降が1拍分右へとずれていく(表1(dg)、表2(dg)、表3(dg))。

<sup>12</sup> 句末高音調はアクセント型の指定とは無関係であるため、記入していない。

表1 2拍名詞の実現 (影付きのセルは中和環境)

環境	ab 型	c 型
a. X=nu、X=ju	$\mu\mu = \mu$	$\mu\mu = ]\mu$
b. X=nu=du、X=ju=du	$\mu\mu = \mu = \mu$	$\mu\mu = ]\mu = \mu$
c. X=ju=mai、X=nkai	$\mu\mu = \mu = ]\mu\mu$	$\mu\mu = ]\mu = \mu\mu$
d. X=nkai=du	$\mu\mu = \mu = \mu]\mu = \mu$	$\mu\mu = ]\mu = \mu\mu = \mu$
e. X=nkai=mai	$\mu\mu = \mu = ]\mu\mu = \mu\mu$	$\mu\mu = ]\mu = \mu\mu = \mu\mu$
f. X=kara	$\mu\mu = ]\mu\mu$	$\mu\mu = ]\mu\mu$
g. X=kara=du、X=mai=du	$\mu\mu = \mu]\mu = \mu$	$\mu\mu = \mu]\mu = \mu$
h. X=kara=mai	$\mu\mu = ]\mu\mu = \mu\mu$	$\mu\mu = ]\mu\mu = \mu\mu$

表2 3拍名詞の実現

環境	ab 型	c 型
a. X=nu、X=ju	$\mu\mu\mu = \mu$	$\mu\mu]\mu = \mu$
b. X=nu=du、X=ju=du	$\mu\mu\mu = \mu = \mu$	$\mu\mu\mu = ]\mu = \mu$
c. X=ju=mai、X=nkai	$\mu\mu\mu = \mu = ]\mu\mu$	$\mu\mu]\mu = \mu = \mu\mu$
d. X=nkai=du	$\mu\mu\mu = \mu = \mu]\mu = \mu$	$\mu\mu]\mu = \mu = \mu\mu = \mu$
e. X=nkai=mai	$\mu\mu\mu = \mu = ]\mu\mu = \mu\mu$	$\mu\mu]\mu = \mu = \mu\mu = \mu\mu$
f. X=kara	$\mu\mu\mu = ]\mu\mu$	$\mu\mu]\mu = \mu\mu$
g. X=kara=du、X=mai=du	$\mu\mu\mu = \mu]\mu = \mu$	$\mu\mu]\mu = \mu\mu = \mu$
h. X=kara=mai	$\mu\mu\mu = ]\mu\mu = \mu\mu$	$\mu\mu]\mu = \mu\mu = \mu\mu$

表3 4拍名詞の実現

環境	ab 型	c 型
a. X=nu、X=ju	$\mu\mu\mu\mu = \mu$	$\mu\mu\mu]\mu = \mu$
b. X=nu=du、X=ju=du	$\mu\mu\mu\mu = \mu = \mu$	$\mu\mu\mu\mu = ]\mu = \mu$
c. X=ju=mai、X=nkai	$\mu\mu\mu\mu = \mu = ]\mu\mu$	$\mu\mu\mu]\mu = \mu = \mu\mu$
d. X=nkai=du	$\mu\mu\mu\mu = \mu = \mu]\mu = \mu$	$\mu\mu\mu]\mu = \mu = \mu\mu = \mu$
e. X=nkai=mai	$\mu\mu\mu\mu = \mu = ]\mu\mu = \mu\mu$	$\mu\mu\mu]\mu = \mu = \mu\mu = \mu\mu$
f. X=kara	$\mu\mu\mu\mu = ]\mu\mu$	$\mu\mu]\mu\mu = \mu\mu$
g. X=kara=du、X=mai=du	$\mu\mu\mu\mu = \mu]\mu = \mu$	$\mu\mu]\mu\mu = \mu\mu = \mu$
h. X=kara=mai	$\mu\mu\mu\mu = ]\mu\mu = \mu\mu$	$\mu\mu]\mu\mu = \mu\mu = \mu\mu$

これまでの観察を次のようにまとめることができる。第一に、ピッチの下降のずれは1拍接語、または1拍接語の連鎖が付く環境に限って起こる。第二に、ab型のピッチの下降が実現するのは、必ず2拍の接語が文節に含まなければならない。別の観点で言い換えると、1拍接語の連鎖が付くと、2拍の接語が付く時と同じ長さの文節が形成されるのにも関わらず、ピッチの下降が現れない。この2点から、1拍接語および1拍接語の連鎖と2拍以上の接語が異なる韻律構造を持っていると解釈せざるを得ない。つまり、ピッチの下降の有無とその位置を正しく記述するためには文節とは別の単位を想定する必要がある。

表4 枠文別の韻律構造 (4拍名詞)

環境	ab型	c型
a. X=nu、X=ju	(μμμμ=μ)	(μμμ)μ=μ
b. X=nu=du、X=ju=du	(μμμμ=μ=μ)	(μμμμ=)μ=μ
c. X=ju=mai、X=nkai	(μμμμ=μ)=(]μμ)	(μμμ)μ=μ)=(μμ)
d. X=nkai=du	(μμμμ=μ)=(μ]μ=μ)	(μμμ]μ=μ)=(μμ=μ)
e. X=nkai=mai	(μμμμ=μ)=(]μμ)=(μμ)	(μμμ]μ=μ)=(μμ)=(μμ)
f. X=kara	(μμμμ)=(]μμ)	(μμ]μμ)=(μμ)
g. X=kara=du、X=mai=du	(μμμμ)=(μ]μ=μ)	(μμ]μμ)=(μμ=μ)
h. X=kara=mai	(μμμμ)=(]μμ)=(μμ)	(μμ]μμ)=(μμ)=(μμ)

そこで、宮古の他の方言と同じように2拍以上の語根・接語によって形成される「韻律語」という単位を導入すると、各アクセント型の実現を簡単に説明できるようになる。つまり、表4のような韻律的構造を想定すると、各アクセント型の表層の音調について次のように(暫時的に)一般化することができる(19)。

## (19) 各アクセント型の暫時的解釈

- a. c型は1番目の韻律語にピッチの下降が指定されている。
- b. ab型は2番目の韻律語にピッチの下降が指定されている。
- c. ピッチの下降は韻律語の次末拍の直前に実現する。

それに加えて、それぞれの一般化について(20)の特殊なケースを記す必要がある。

- (20) a. 1番目の韻律語が2拍である場合はc型のピッチの下降が2番目の韻律語に実現する。その結果、ab型との中和が起こる。
- b. 2番目の韻律語がない場合はab型のピッチの下降が実現しない<sup>13</sup>。
- c. ピッチの下降が指定されている韻律語が文節の1番目の韻律語で、かつ3拍である場

<sup>13</sup> 1番目の韻律語が2拍で、次の韻律語がない場合は、c型でもピッチの下降が実現しないことが予測される。しかし、裸格がないため、文末イントネーションが被さる文末以外の環境では、そのような条件が中々成立しない。c型の2拍の副詞や副詞として使われるc型の2拍名詞を調べる必要がある。

合は、ピッチの下降が韻律語の末尾拍の直前に実現する。

韻律語を想定することが複合語の音調との比較からも支持される。つまり、2つの拍名詞から成る複合語は2拍の名詞と2拍の接語と同じ韻律的な振る舞いを示している。ab型の mugl「麦」と2番目の韻律語に下降の指定がある mami + gi:「豆 + 木」の比較を(21)(22)に示す。

- (21) a. (mugl) = (ka]ra = dú) ... 「麦 = ABL = FOC ...」  
 b. (mami) + (gi:] = jú) ... 「豆 + 木 = ACC」
- (22) a. (mugl) = (]kara) = (maí) ... 「麦 = ABL = INC ...」  
 b. (mami) + (]gi:] = (kará) ... 「豆 + 木 = ABL」

以上、皆愛方言について韻律語という単位が必要であることを論じた。その暫時的な定義を(23)に示す。この定義では、単純名詞や2拍以上の接語だけでなく、複合語の構成要素もそれぞれ1つの韻律語を形成することに注意されたい。

- (23) 韻律語の定義  
 「韻律語は2拍以上の語彙的語根・接語によって形成される単位である」

韻律語を想定することにより、各アクセント型の音韻的な解釈が可能となる。しかし、2.2節で述べたように複合語で観察される音調パターンが単純名詞より多く、そのため、もし複合アクセント法則が成立しているのであれば、単純名詞において3種類のアクセント型が対立する可能性が残されている。従って、単純名詞のアクセント型の音韻的な解釈を行う前に複合語の詳細な調査結果を経て、対立するアクセント型の数を確認する必要がある。次節では、複合語の詳細な調査結果に基づき、皆愛方言の単純名詞は少なくとも3種類のアクセント型が区別されることを示す。

## 5 皆愛方言の（少なくとも）3型のアクセント体系

本節の本題に入る前に、前節で明らかにした韻律語を使って表層の音調をより簡潔に記述できる方法を導入する。以下では、対象の語を含む文節におけるピッチの下降の有無とその位置に着目して表層の音調を次のように記述する。すなわち、ピッチの下降がないパターンを F0 で表し、ピッチの下降が実現するパターンを、下降が実現する韻律語の位置番号を使って F1、F2、F3 などのように表す<sup>14</sup>。単純環境と複合語環境の例を(24)(25)に示す。

- (24) a. F1 : (s]ga]ma = nu) (panas = su) ... 「洲鎌 = GEN 話 = ACC ...」  
 b. F1 : (s]ga]ma = n)(kai = dú) ... 「洲鎌 = DIR = FOC ...」

<sup>14</sup> F は Falling の略である。このノーテーションは音声学の f0「基本周波数」とや f1-f3「第1-3 フォーマント」と混同されかねないため、望ましくない側面はある。しかし、適切かつ見やすいという条件を満たす他のノーテーションを思いつくことができなかつたため、本稿では、暫時的に F0 などをを用いる。

- c. F2 : (pssara = n)(ka]i = dú) ... 「平良 = DIR = FOC ...」  
 d. F0 : (pssara = nu) (panas = ]su)<sup>15</sup>... 「平良 = GEN 話 = ACC ...」
- (25) a. F1 : (s]ga]ma) + (bikidun = nu) (panas = su) ... 「洲鎌 + 男 = GEN 話 = ACC ...」  
 b. F2 : (tumu] + (bikidu]n = nu) (panas = su) ... 「友利 + 男 = GEN 話 = ACC ...」  
 c. F0 : (uidz] + (bikidun = nu) (panas = ]su) ... 「上地 + 男 = GEN 話 = ACC ...」

1節と 2.2で指摘したように、複合語において3つのパターンが観察されるとしても、これらのパターンは前部要素のアクセント型の対立に起因するとはただちには判断できない。つまり、複合語で観察されるパターンは完全に前部要素によって決まるということをまず実証する必要がある。このため、語彙的に登録されていそうな複合語ではなく、生産的に形成される複合語を調査対象とするべきである。本節では、生産的に形成される複合語の複数の調査パラダイムを実施した上で、複合アクセント法則が成立していることを示す。それに従って、皆愛方言の単純名詞は3つのアクセント型が区別されると結論付ける（ただし、地名名詞では4項のアクセント対立が見られる）。

なお、本節で扱う「複合語」は「2つの名詞語根、または名詞語根と単一形態的動詞の転成名詞から構成される語」のように定義される。ここでいう「名詞語根」は名詞の形態素（つまり、共時的体系においてそりより分解できない意味の最小単位）である。

### 5.1 地名の調査パラダイム

宮古語における地名名詞は複合語の前部要素になりやすい。例えば、後部要素が人間を表す名詞であれば、複合語を幾らでも作ることができる(26)(27)。このため、地名名詞は生産的に形成される複合語の音調を調べるために非常によく適していると言える。地名をこのように使った研究は存在する(松森 2015)ものの、十分な数の複合語が調べられたわけではない。ここでは、地名の調査パラダイムを確立させて十分な数の複合語の調査結果を報告・分析する。

- (26) a. tarama + p]tu 「多良間+人（多良間島出身の人）」  
 b. tarama + munu 「多良間+者（多良間島出身の人）」  
 c. tarama + midum 「多良間+女（多良間島出身の女性）」  
 d. tarama + uja 「多良間+父（多良間島出身の中年の男性）」  
 e. tarama + ffa 「多良間+子（多良間島出身の子供）」  
 等々

<sup>15</sup> panas = ]su に観察される下降は対象の名詞である pssara のアクセント型とは無関係である（注9を参照されたい）。(pssara = nu) においては下降が実現しないため、F0のパターンに該当する。次の例においても同様である。

## 5.1.1 データ

対象の地名と後部要素に使った名詞を(27)(28)に挙げる。地名と後部要素の各組合せを  $X+Y=nu\ panas=su \dots$  「 $X+Y=GEN$  話 =  $ACC \dots$ 」の枠文で調べた。それに加えて、それぞれの地名について単純名詞の環境における音調を  $X=nu\ panas=su \dots$  「 $X=GEN$  話 =  $ACC \dots$ 」(以下「単純1」と  $X=nkai=du \dots$  「 $X=DIR=FOC \dots$ 」(以下「単純2」)の枠文で調べた。

## (27) 調査対象の地名 (24 語)

irav	「伊良部」 <small>いらぶ</small>	junapa	「与那覇」 <small>よなは</small>	kaɣmata	「狩俣」 <small>かりまた</small>
kanittsa	「カニツァ」 <small>かみつ</small>	nudzakɣ	「久松」 <small>ひさまつ</small>	sɣgama	「洲鎌」 <small>すがま</small>
tarama	「多良間」 <small>たらま</small>	uruka	「砂川」 <small>うるか</small>	tanani:	「棚根」 <small>たなね</small>
ffima	「来間」 <small>くりま</small>	tumuɣ	「友利」 <small>ともり</small>	mja:ku	「宮古」 <small>みやこ</small>
mja:gun	「宮国」 <small>みやくに</small>	jamatu	「大和 (本土)」 <small>やまと</small>	aragusɣku	「新城」 <small>あらぐすく</small>
sɣmadzɣ:	「島尻」 <small>しまじり</small>	ikima	「池間」 <small>いけま</small>	ka:mtsɣ	「川満」 <small>かわみつ</small>
uidzɣ	「上地」 <small>うえち</small>	pssara	「平良」 <small>ひらら</small>	bura	「保良」 <small>ぼら</small>
ja:ma	「八重山」 <small>やえやま</small>	isarafugu	「石原窪」 <small>いさらふぐ</small>	nna:ɣ	「皆愛」 <small>みなあい</small>

## (28) 調査対象の後部要素 (9 語)

- a. ab 型: bikidum<sup>ab</sup> 「男」、ffa<sup>ab</sup> 「子供」、futsɣ<sup>ab</sup> 「語」、midum<sup>ab</sup> 「女」、mmari<sup>ab</sup> 「生まれ」
- b. c 型: adza<sup>c</sup> 「兄」、anga<sup>c</sup> 「姉」、ffa-gama<sup>c</sup> 「子供-DIM」、munuɣ<sup>c</sup> 「語」

## 5.1.2 調査結果

地名を含む複合語の調査結果を表5に示す(データが欠落している場合はセルを空白のままにしている)。これらの複合語において3つの異なるパターンが観察された(29)。すなわち、ピッチの下降が実現しないパターン(29c)、ピッチの下降が1番目の韻律語に実現するパターン(29a)、ピッチの下降が2番目の韻律語に実現するパターン(29b)が現れる。

- (29) a. F1 : (sɣga]ma) + (bikidun = nu) (panas = su) ... 「洲鎌 + 男 = GEN 話 = ACC ...」
- b. F2 : (tumuɣ) + (bikidu]n = nu) (panas = su) ... 「友利 + 男 = GEN 話 = ACC ...」
- c. F0 : (uidzɣ) + (bikidun = nu) (panas = ]su) ... 「上地 + 男 = GEN 話 = ACC ...」

それぞれのパターンの分布を見ると、まず、後部要素のアクセント型が複合語全体の音調に関与していないことが分かる。その理由は次の2点にある。第一に、同じ後部要素でも複合語によって音調が異なる。第二に、後部要素のアクセント型が変わっても、複合語の音調が変わらない。これに対して、複合語全体の音調が前部要素に依存することが言える。なぜならば、前部要素を固定するとどのような後部要素でも同じ音調が観察されるからである。このように、複合語全体の音調が前部要素によって決定されるので、少なくとも地名を前部要素にした複合語においては複合アクセント法則が成立していると解釈できる。そして、前部要素によって3つの

表5 地名を含む複合語の音調  
(影付きセルは発音間違いと思われる)

	男 <sup>ab</sup>	子供 <sup>ab</sup>	語 <sup>ab</sup>	女 <sup>ab</sup>	生 <sup>ab</sup>	兄 <sup>c</sup>	姉 <sup>c</sup>	子 <sup>c</sup>	語 <sup>c</sup>
上地	F0	F0	F0	F0	F0	F0	F0	F0	F0
棚根	F0	F0	F0	F0	F0	F2	F0	F0	F0
平良	F0	F0	F0	F0	F0	F0	F0	F0	F0
保良	F0	F0	F0	F0	F0	F0	F0	F0	F0
八重山	F0	F0	F0	F0	F2	F0	F0	F2	F0
宮古	F2	F2	F2	F2	F2	F2	F2	F2	F2
皆愛	F2	F2	F2	F2	F2	F2	F2	F2	
伊良部	F2	F2	F2	F2	F2	F2	F2	F2	F2
狩俣	F2	F2	F2	F2	F2	F2	F2	F2	F2
来間	F2	F2	F2	F2	F2	F2	F2	F2	F2
友利	F2	F2	F2	F2	F2	F2	F2	F2	F2
宮国	F2	F2	F2	F2	F2	F2	F2	F2	F2
大和	F2	F2	F2	F0	F2	F2	F2	F2	F2
新城	F2	F2	F2	F2	F2	F2	F2	F2	F2
島尻	F2		F2	F2	F2	F2	F2	F2	F2
池間	F2	F2	F2	F2	F2	F2	F2	F2	F2
川満	F2	F2	F2	F2	F2	F2	F2	F2	F2
カニツツァ	F1	F1	F1	F1	F1	F1	F1	F1	F1
洲鎌	F1	F1	F1	F1	F1	F1	F1	F1	F1
多良間	F1	F1	F1	F1	F1	F1	F1	F1	F1
久松	F1	F1	F1	F1	F2	F1	F1	F1	F1
与那覇	F1	F1	F1	F1	F1	F1	F1	F1	F1
砂川	F2	F1	F1	F1	F1	F1	F1	F1	F1
石原窪	F1	F1	F1	F1	F1	F1	F1	F1	

異なるパターンが観察されるため、これらの前部要素が3つの異なるアクセント型に所属していると想定せざるを得ない。すなわち、皆愛方言は3型のアクセント体系を持つと結論できる。

しかし、単純名詞の環境における音調を見るとそれほど簡単な話ではないことが分かる。複合語の前部要素と単純名詞の環境における地名の音調を表6に示す。

上の4節で確認したように、単純名詞の環境では2つのパターンしか観察されない。ただし、さらに詳しく見ると、次の通りである。複合語の環境でF1のパターンを示す語は単純名詞の環境でも一貫してF1(つまりc型の音調)を示している(30)。同様に、複合語の環境でF0のパターンを示す語は単純名詞の環境では一貫してab型のパターンを示している。具体的に言うと、

表6 地名を含む複合語の音調：複合語と単純環境の比較

	複合語	単純 1	単純 2
上地	F0	F0	F2
棚根	F0	F0	F2
平良	F0	F0	F2
保良	F0	F0	F2
八重山	F0	F0	F2
宮古	F2	F0	F2
皆愛	F2	F0	F2
伊良部	F2	F1	F1
狩俣	F2	F1	F1
来間	F2	F1	F1
友利	F2	F1	F1
宮国	F2	F1	F1
大和	F2	F1	F1
新城	F2	F1	F1
島尻	F2	F1	F1
池間	F2		F1
川満	F2	F1	F1
カニツツァ	F1	F1	F1
洲鎌	F1	F1	F1
多良間	F1	F1	F1
久松	F1	F1	F1
与那覇	F1	F1	F1
砂川	F1	F1	F1
石原窪	F1	F1	F1

1 つの韻律語が形成される単純 1 の環境では F0 (31a)、2 つ以上の韻律語が形成される単純 2 の環境では F2 のパターンを示している(30b)。

- (30) a. F1 : (s<sub>1</sub>gama = nu) (panas = su) ... 「洲鎌 = GEN 話 = ACC ...」(単純 1)  
 b. F1 : (s<sub>1</sub>ga]ma = n)(kai = dú) ... 「洲鎌 = DIR = FOC ...」(単純 2)
- (31) a. F0 : (pssara = nu) (panas = ]su) ... 「平良 = GEN 話 = ACC ...」(単純 1)  
 b. F2 : (pssara = n)(ka]i = dú) ... 「平良 = DIR = FOC ...」(単純 2)

しかし、これに対して複合語の環境で F2 のパターンを示す語は単純名詞の環境においては一貫しないパターンを示している。一部の語は F1 (つまり、c 型のパターン) で実現している(32a)。一方、もう一部の語は F0・F2 (つまり、ab 型のパターン) で現れる(32b)。

- (32) a. (i) F1 : (tumu]₁ = nu) (panas = su) ... 「友利 = GEN 話 = ACC ...」 (単純 1)  
 (ii) F1 : (tumu]₁ = n)(kai = dú) ... 「友利 = DIR = FOC ...」 (単純 2)  
 b. (i) F0 : (nnaṛ] = nu) (panas = ]su) ... 「皆愛 = GEN 話 = ACC ...」 (単純 1)  
 (ii) F2 : (nnaṛ] = n)(ka]i = du) ... 「皆愛 = DIR = FOC ...」 (単純 2)

単純名詞の環境では 2 つのパターン、複合アクセント法則が成立している複合語の環境では 3 つのパターンが観察されるが、単純名詞と複合語のパターンの組み合わせからすると、4 つもの異なるカテゴリーを想定せざるを得ない。つまり、データを素直に分析すれば、表 7 に示す 4 つのアクセント類を立てなければならない。

表7 皆愛方言のアクセント型

型	単純 1	単純 2	複合語
a	F0	F2	F0
b1	F0	F2	F2
b2	F1	F1	F2
c	F1	F1	F1

しかし、4 つのアクセント型を想定するべきかに当たっては詳細な議論が必要である。宮古語の中で 4 型のアクセント体系が既に実証されており (多良間仲筋方言、(セリック 2021))、その可能性は十分にあると考えられる。ただし、多良間仲筋方言で想定される 4 つのアクセント型は音調の上で対立している(33)。これに対して、皆愛方言では表層のレベルで最大 3 つの音調しか対立していないため、多良間仲筋方言とは状況が大きく違う。つまり、皆愛方言について 4 型のアクセント体系を認めた場合、音調の対立に加えて「環境別の指定」というさらなる対立変数を導入する必要があるが生じる。

- (33) 多良間仲筋方言の 4 つのアクセント型 (セリック 2021)
- a. a 型 : (bikidum) = (mai) ... 「男 = INC ...」  
 b. b 型 : (baka:ri) = (ma]i) ... 「別れ = INC ...」  
 c. c 型 : (mavvu]l) = (mai) ... 「守り神 = INC ...」  
 d. d 型 : (u]i)(kjo:) = ([mai) ... 「茴香 = INC ...」

この「環境別の指定」を詳しく見ると、次の通りである。c 型と b1 型は単純名詞・複合語のいずれの環境でも対応するパターンを示している。c 型はどの環境 (単純 1、単純 2、複合語) で

も 1 つ目の韻律語にピッチの下降が実現する。b1 型は単純 2 と複合語の環境では 2 番目の韻律語にピッチの下降が実現する。ただし、文節が 1 つの韻律語から構成される単純 1 の環境の場合は 2 つ目の韻律語がないため、アクセント型によって指定されるピッチの動きが実現できず、その結果、F0 のパターンになる。表層のレベルでは単純 1 と単純 2 に観察される b 型のパターンが異なるが、同じ指定、すなわち「2 番目の韻律語に下降が実現する」というふうに解釈できる。従って、c 型と b1 型は環境を問わず同じ指定を受けていると解釈できる。a 型は単純 2 (F2) と複合語 (F0) の環境において異なる指定があるように見えるが、6 節で詳しく論じるように無指定の型として分析することができるため、単純 2 の環境に現れる下降は別の原理で説明される。しかし、この 3 つの型と異なり、b2 型は環境によって対応しないパターンで実現している。複合語の環境では、ピッチの下降が 2 番目の韻律語に指定されているのに対して、単純名詞の環境では、ピッチの下降が 1 番目の韻律語に指定されている。このように、b2 型は環境によって異なる指定を受けていることが分かる。

以上のように、b2 型は唯一環境別に異なる指定を受けているので、アクセント体系の中で浮いている存在であることが言える。つまり、b2 型を語彙的な例外として処理するという分析も成立する可能性がある。そこで、b2 型を体系の中に納まる 1 つのアクセント型として立てる分析と、b2 型を b1 型の「例外」として処理する分析のそれぞれの妥当性を判断するために「所属語彙」という基準が有効である。具体的に言うと、特殊な振る舞いをする語群が「少数である」及び「顕著な片寄りを示す」という条件を満たせば、その振る舞いを「例外」として記述することができる。逆に、調査を重ねれば重ねるほど新しい所属語彙が見つかっていくことと、顕著な片寄りが見られないことが確認できれば、その特殊な振る舞いをアクセント体系の中で定着したアクセント型として分析することが可能である。

ここで報告している地名には b2 型に所属している語が最も多く、語数として b1 型をはるかに上回っている。しかし、以下の 5.2.2 節で報告する一般名詞の調査では、b1 型が多く見付かるのに対して、b2 型が 1 語も見付かっていない。さらに、b2 型には B 系列の *jamatu* 「大和」が入っているので、b2 型の所属語彙の中に B 系列の語が見つかることが予測されるが、これまで調べられてきた B 系列の名詞はそのほとんどが単純 1 の環境において F0 の音調を示している (特にセリック (2020a:192-193) にある系列別の語彙リストを参照されたい)。現時点では、確認できている b2 型の所属語彙は本節の地名のみとなっている<sup>16</sup>。つまり、「少数である」と「意味的な片寄りがある」という条件が満たされているため、b2 型を例外的なパターンとして分析できそうである。ただし、十分な数の語彙が調べられていないため、調査を重ねていくにつれてこれらの条件が成立し続けるかどうかは全く分からない。従って、ここでは b2 型に関する解釈を保留する。ただし、音調の上で対立する a 型、b1 型、c 型の方が皆愛方言のアクセント体系の核心を成していると思われている。

以上、皆愛方言が少なくとも 3 種類のアクセント型を区別していることが分かった。ところ

<sup>16</sup> ただし、*uibi* 「指」は b2 型の所属語彙である可能性がある。残念ながら、十分なデータがないため、その所属をまだ判断できない。

が、アクセント型の認定方法が大きな問題となる。なぜならば、ある名詞のアクセント型を認定するために、単純名詞の環境における音調に加えて、その名詞が前部要素となる、生産的に形成される複合語の音調も調べる必要があるからである。残念ながら、本節で用いた調査パラダイムは地名のアクセント型を認定するのに特化しており、その汎用性が低い。従って、全ての名詞について複合語が生産的に作れるような調査パラダイムを新しく開発しなければならない。次節では、汎用性が高いという条件を満たす新しい調査パラダイムを提案する。

## 5.2 目的節の調査パラダイム

前節で見たようにアクセント型の認定方法が問題となる。幸いなことに全ての名詞に適用できる調査パラダイムを提案することができる。宮古語では、「目的節」と呼ばれる従属節があり、この従属節は述語（自動詞・他動詞）の名詞形と =ga 「PURP」とによって構成され、「～しに…」の意味を表す(34)。そして、述語が他動詞で、その目的語が表現されている場合は、目的語と述語がそれぞれの句で実現することができる(35a)一方、1つの複合語を形成することもできる(35b)<sup>17</sup>。

(34) appɪ = ga            ika-di = ti: ...  
 遊ぶ.NML = PURP 行く -VOL = QUOT  
 「遊びに行こうと…」(セリック 2018:163)

(35) a. fuso =: kaɪ = ga            ik-a  
 草 = ACC 刈る.NML = PURP 行く -HORT  
 「草を刈りに行こう」  
 b. fusa + kaɪ = ga            ik-a  
 草 + 刈る.NML = PURP 行く -HORT  
 「草刈りに行こう」  
 (調査ノート)

目的語と他動詞の組み合わせは自由度が高いため、目的節を使えば、どの名詞でもそれを前部要素として含む複合語を生産的に作ることが可能である(36)。この調査パラダイムは汎用性が高いだけでなく、対象の名詞を複数の複合語でテストできる点でも優れている。

(36) a. midzɪ + tuɪ = ga ... 「水 + 取る.NML = PURP ...」  
 b. midzɪ + ko: = ga ... 「水 + 買う.NML = PURP ...」  
 c. midzɪ + vv = ga ... 「水 + 売る.NML = PURP ...」  
 d. midzɪ + sɪti = ga ... 「水 + 捨てる.NML = PURP ...」  
 等々

<sup>17</sup> 複合語を形成することが多いが、両方の構造が自由に交替できる。

ただし、この調査パラダイムが有効であるためには、目的節において形成される複合語に複合アクセント法則が適用されていなければならない。それを確認するためにまず 5.2.1 節では目的節の調査パラダイムを地名に応用し、その有効性を確認する。そして、5.2.2 節では一般名詞に関する調査結果を報告する。

### 5.2.1 目的節における地名

使用した枠文を(37)<sup>18</sup>に示す。本来は後部要素が a 型の動詞である枠文も調べる必要があるが、地名名詞に合う適切な a 型の他動詞は思いつかなかったので調査していない。調査結果とその要約を表 8 と表 9 に示す。

- (37) (uidzɨ) + (mi:<sup>c</sup> = ga) = (mai = du) ɣkɨ-ta:  
 上地 + 見る.NMLZ = PURP = INC = FOC 行く -PST  
 「上地見物にも行った」

調査結果を整理してみよう。まず、c 型の地名は目的節において一貫して F1 のパターンを示している。これは、他の複合語に見られるパターンと同じであることから、目的節においても複合アクセント法則が成立していると解釈しても矛盾が生じない。b1 型の地名も目的節と複合語に現れるパターンが一致しているため、同様である。

しかし、これに対して、a 型と b1 型はそれぞれ 2 つの異なるパターンが現れる。b2 型の地名から見てみよう。b2 型の地名は F1 と F2 のパターンが観察される<sup>19</sup>。F2 は複合語に見られるパターンと同じなので、目的節において F2 が現れるのは複合アクセント法則が適用された結果と見ることができる。これに対して、F1 は単純名詞の環境で観察されるパターンと一致しているため、目的節において F1 が現れる場合、目的節の環境が「単純名詞の環境に準じる」と解釈せざるを得ない。その要因として、複合語が形成されるのにも関わらず、アクセント単位 (=1 つのアクセント型が実現する単位) が前部要素と後部要素で分かれることが考えられる。表層のレベルでは c 型に分類される後部要素のアクセント型の実現の痕跡がないが、同じ文節においてアクセント型によって指定される音調の数に関するような制約が働いている可能性がある。F1 と F2 が現れる違いを(38)に示す ({} はアクセント単位の境界を表す)。

- (38) a. 複合アクセント法則が適用された 1 単位形  
 {(jamatu<sup>b1</sup>) + (mi:<sup>c</sup> = ]ga) = (mai = du)} ... 「大和 + 見る.NML = PURP = INC ...」  
 b. 2 単位形  
 {(kaɣ]mata<sup>b1</sup>)} + {(mi:<sup>c</sup> = ga) = (mai = du)}... 「狩俣 + 見る.NML = PURP = INC ...」

同じ環境なのにも関わらず、場合によっては 1 単位または 2 単位が形成されるという分析は矛

<sup>18</sup> 過去形の韻律構造はまだ明らかになっていないので、韻律語の表記を省いた。

<sup>19</sup> 一回限りの調査をしているため、観察される音調の「揺れ」は語彙的な違いによるのか、それとも、同じ語の場合でも見られるのかは不明である。

表8 目的節における地名の音調

地名	型	目的節
上地		F3
棚根		F2
平良	a	F2
保良		F3
八重山		F2
宮古		F2
皆愛	b1	F2
伊良部		F2
狩俣		F1
来間		F2
友利		F2
宮国		F1
大和	b2	F2
新城		F1
島尻		F1
池間		F2
川満		F1
カニツツァ		F1
洲鎌		F1
多良間		F1
久松	c	F1
与那覇		F1
砂川		F1
石原窪		F1

表9 目的節における地名の音調 (要約)

型	単純 2	複合語	目的節
a	F2	F0	F2 ~ F3
b1	F2	F2	F2
b2	F1	F2	F1 ~ F2
c	F1	F1	F1

盾しているように思われるかもしれない。しかし、多良間方言について同様の環境で全く同じ現象が起きていることが既に報告されている。セリック (2020b) によると、名詞と動詞の名詞形から成る複合語は2つのパターンを示している。1つ目は、1つのアクセント単位が形成され、複合アクセント法則が適用されるパターンである(39a)。2つ目は、2つのアクセント単位が形成され、複合語のそれぞれの構成要素のアクセント型が実現するパターンである(39b)。1単位形と2単位形の詳しい出現条件についてはよく分かっていないものの、2単位形が出現する要因として、複合語の構成要素の関係が関わっていると考えられる。つまり、複合語化した目的語と述語の名詞形は統語的な関係によって結ばれているため、他の複合語の構成要素と比べて

その独立性が相対的に高く、その結果、2 単位形となりやすいことが想定できる。

- (39) a. 1 単位形:  $\{(pu]ni^c) + (bu]^c) = (mai)\}$ ... 「骨折も...」  
 b. 2 単位形:  $\{(na]ka^c)\} + \{(tu]^c) = ([mai)\}$ ... 「仲取りも...」  
 セリック (2020b:298) より

では、a 型の地名を見てみよう。a 型の地名は F3 と F2 のパターンが観察される。F3 は 5.1 節で見てきた複合語の環境に出現するパターンとは異なるが、この違いはあくまで文節の構造の違いによる。なぜならば、5.1 節で報告した調査では、対象の複合語が含まれる文節が 2 つの韻律語から構成される(40a)のに対して、本節の調査では、対象の複合語が含まれる文節は 3 つの韻律語から構成される(40b)からである。5.1 節で調べた複合語を類似した粹文、つまり 3 つの韻律語から構成される文節に入れれば、F3 のパターンが出てくる(40c)。

- (40) a.  $(uidz_1^a) + (munu = nu) \dots$  「上地 + 者.GEN ...」  
 b.  $(uidz_1^a) + (mi: = ga) = (ma]i = dú) \dots$  「上地 + 見る.NML = PURP = INC = FOC ...」  
 c.  $(uidz_1^a) + (munu) = (ka]ra = dú) \dots$  「上地 + 者 = ABL = FOC ...」

それに従って、目的節に現れる F3 のパターンを複合アクセント法則が適用されたパターンであると解釈できる(41a)。

現れるもう 1 つのパターン、すなわち F2 は単純名詞の環境と同じであるが、表層の音調の実現原理が異なっている(単純名詞の環境の実現原理については 6 節を参照されたい)。ここでは、b1 型と同様に 1 単位形と 2 単位形の実現があると仮定すれば、F2 のパターンを次のように説明できる。つまり、目的節の複合語の構成要素がそれぞれ 1 つアクセント単位をなしており、前部要素の a 型は実現する単位が 1 つの韻律語から構成されるため、6 節で見る通り、ピッチの下降がなく高く実現する。それに対して、後部要素のアクセント型が c 型であるため、1 番目の韻律語にピッチの下降が実現する(41b)。ここで、ピッチの下降が現れるのは後部要素のアクセント型によるという解釈である。

- (41) a. 複合アクセント法則が適用された 1 単位形  
 $\{(uidz_1^a) + (mi: = ga) = (ma]i = dú)\} \dots$  「上地+見る.NML = PURP = INC ...」  
 b. 2 単位形  
 $\{(pssara^a)\} + \{(mi: = ]ga) = (mai = du)\} \dots$  「平良+見る.NML = PURP = INC ...」

以上見てきたように、目的節において形成される複合語は 1 単位形と 2 単位形で揺れている。つまり、目的節の調査パラダイムは万能ではないということである。しかし、それでも複合アクセント法則が適用された 1 単位形のパターンが出ることもあり、その場合、アクセント型を確実に認定できる。構成要素のアクセント型の組み合わせによって目的節で予測される音調を

表 10と表 11に示す<sup>20</sup>。

表10 目的節で予測される音調 (2 拍)				表11 目的節で予測される音調 (3 拍～)			
前部	後部	1 単位形	2 単位形	前部	後部	1 単位形	2 単位形
a	a	F3	F3	a	a	F3	F3
	c	F3	F2		c	F3	F2
b	a	F2	F3	b1	a	F2	F3
	c	F2	F2		c	F2	F2
c	a	F2	F2	b2	a	F2	F1
	c	F2	F2		c	F2	F1
c	a	F2	F2	c	a	F1	F1
	c	F2	F2		c	F1	F1

これらの表では、アクセント型が確実に認定できるケースが赤く塗ってある。目的節の複合語において1単位形も2単位形も出現しうる結果、アクセント型の認定を行う際にどの組み合わせでも有効であるわけではない。その原理について少し詳しく説明をしよう。アクセント型を認定するために、まず、単純名詞の音調を元に a・b1 型か b2・c 型の所属情報が得られる。次に、複合語の音調を元に a 型か b1 型、あるいは b2 型か c 型の所属が判断できる。しかし、目的節で形成される複合語は複合アクセント法則が適用された1単位形と2単位形とで揺れるため、1単位・2単位の両方の実現を考慮してアクセント型を確実に認定できる組み合わせに着目する必要がある。例えば、単純環境では F0・F2 (a 型・b1 型) で実現する名詞と a 型動詞の組み合わせにおいて F3 のパターンが観察されたならば、前部要素が a 型であるとはただちには判断できない。なぜならば、b 型 (b1 型) と a 型動詞の組み合わせが2単位として実現する場合、F3 のパターンが出るからである。つまり、b 型 (b1 型) と a 型の2単位形の可能性を排除し切れない。これに対して、単純環境では F0・F2 (a 型・b1 型) で実現する名詞と c 型動詞の組み合わせにおいて F3 が観察されれば、2単位形としての解釈ができず、前部要素が a 型であることが確実に言える。

以上のことから、目的節の調査パラダイムは万能ではないにしても、それを使うことによって一定の結果が得られることが期待できると言える。

### 5.2.2 一般名詞

調査対象語と調べた粋文は(42)(43)の通りである (系列の情報を上付きの文字で示す)。意味的な制約もあり、各名詞に対して全ての粋文を調べることができなかったが、各名詞に対して少なくとも3つの粋文を調べた。

<sup>20</sup> 動詞は2つの対立するアクセントクラスしかない。ここでは、多良間方言との対応に基づき、(目的節に現れる) 動詞の名詞形が a 型と c 型であると仮定しておく。

(42) a. ab 型 (36 語):

ami<sup>A</sup>「飴」、isɿ<sup>A</sup>「石」、ɿzu<sup>A</sup>「魚」 kabɿ<sup>A</sup>「紙」、kan<sup>A</sup>「蟹」、katçu:<sup>A</sup>「鯉」、maɿ<sup>A</sup>「米」、midzɿ<sup>A</sup>「水」、mnagu:<sup>A</sup>「砂」、mutsɿ<sup>A</sup>「餅」、taki<sup>A</sup>「竹」、tuɿ<sup>A</sup>「鳥」、usɿ<sup>A</sup>「牛」、ikja<sup>A</sup>「鳥賊」、a:<sup>B</sup>「粟」、sanim<sup>A</sup>「月桃」<sup>21</sup>、sudi<sup>B</sup>「袖」、fusa<sup>B</sup>「草」、bu:gɿ「砂糖黍」、mussu<sup>B</sup>「筵」<sup>22</sup>、ki:<sup>B</sup>「木」、nu:ma「馬」、mami<sup>B</sup>「豆」、mugɿ<sup>B</sup>「麦」、mm<sup>B</sup>「芋」、in<sup>B</sup>「犬」、avva<sup>B</sup>「油」、mta<sup>B</sup>「土」、ko:dzɿ<sup>A</sup>「麴」、sani<sup>B</sup>「種」、maju<sup>B</sup>「眉毛」、dzɿ:<sup>B</sup>「土地」、ja:<sup>B</sup>「家」、taku<sup>B</sup>「蝸」、tçai:<sup>B</sup>「お茶」、pana<sup>B</sup>「花」

b. c 型 (24 語):

funi<sup>C</sup>「船」、magu「容器の一種」、uɿ<sup>B</sup>「瓜」、bo:<sup>C</sup>「棒」、pɿ:<sup>C</sup>「針」、kami<sup>C</sup>「甕」、nabi<sup>C</sup>「鍋」、kuv<sup>C</sup>「昆布」、sɿv<sup>C</sup>「冬瓜」、funiɿ<sup>C</sup>「蜜柑」、a:sa<sup>C</sup>「石蓴」、pindza<sup>C</sup>「山羊」、tçaban「茶碗」、abasa<sup>C</sup>「ハリセンボン」、ga:na「家鴨」、unagɿ<sup>C</sup>「鰻」、jumuna<sup>C</sup>「鼠」、ka:ra<sup>C</sup>「瓦」、katana<sup>C</sup>「包丁」、ɿzara<sup>C</sup>「鎌」、pasam<sup>C</sup>「鋏」<sup>23</sup>、guçan<sup>C</sup>「杖」、dadifu「木の一種」、o:gɿ<sup>C</sup>「扇」

(43) 粹文 (X は対象語)

- a. X + fo:<sup>a</sup> = ga = mai = du ... 「X+ 食べる.NML = PURP = INC = FOC」  
 b. X + ko:<sup>a</sup> = ga = mai = du ... 「X+ 買う.NML = PURP = INC = FOC」  
 c. X + vv<sup>a</sup> = ga = mai = du ... 「X+ 売る.NML = PURP = INC = FOC」  
 d. X + mi:<sup>c</sup> = ga = mai = du ... 「X+ 見る.NML = PURP = INC = FOC」  
 e. X + tuɿ<sup>c</sup> = ga = mai = du ... 「X+ 取る.NML = PURP = INC = FOC」

まず、c 型の調査結果を見てみよう。c 型名詞の音調を表 12 に示す。どの粹文でも一貫したパターンが観察される。2 拍名詞は 2 番目の韻律語にピッチの下降が生じる (F2)。3 拍以上の名詞は 1 番目の韻律語にピッチの下降が生じる (F1)。これらのパターンは表 10 と表 11 で予測される通りである。3 拍以上の名詞については、b2 型が紛れても F1 のパターンが実現しうするため、b2 型の可能性は完全に排除できていない。しかし、複合語を多く試しても繰り返し F1 が観察されとなると、b2 型の可能性が低くなると考えることができる。つまり、ここの 3 拍以上の名詞を c 型に分類しても差し支えがない (なお、そのほとんどが C 系列に所属しているため、b2 型の可能性はそもそも低い)。

<sup>21</sup> 「五十嵐語彙」では X とされるが、A を再建する。

<sup>22</sup> 「五十嵐語彙」では C とされるが、伊江島 muɿɿ<sup>b</sup>、多良間 mussu<sup>a~b</sup>、皆愛 mussu<sup>ab</sup>、与那国 musu<sup>b</sup> から B 類である可能性の方が高い。

<sup>23</sup> 琉球祖語では B だが、南琉球祖語では C である。

表12 c型名詞調査結果

拍数	対象語	X + mi: <sup>c</sup>	X + tuŋ <sup>c</sup>	X + fo: <sup>a</sup>	X + ko: <sup>a</sup>	X + vv <sup>a</sup>
2	uŋ <sup>B</sup>	瓜	F2	F2	F2	F2
	bo: <sup>C</sup>	棒	F2	F2		F2
	pŋ: <sup>C</sup>	針	F2	F2		F2
	kami <sup>C</sup>	甕	F2	F2		F2
	nabi <sup>C</sup>	鍋	F2	F2		F2
	kuv <sup>C</sup>	昆布	F2	F2		F2
	sŋv <sup>C</sup>	冬瓜	F2		F2	F2
	magu	容器の一種	F2	F2		F2
	funi <sup>C</sup>	船		F2		F2
3	abasa <sup>C</sup>	針千本	F1	F1	F1	F1
	ga:na	家鴨	F1	F1	F1	F1
	unagŋ <sup>C</sup>	鰻	F1	F1	F1	F1
	jumuna <sup>C</sup>	鼠	F1	F1		F1
	ka:ra <sup>C</sup>	瓦	F1	F1		F1
	katana <sup>C</sup>	包丁	F1	F1		F1
	ŋzara <sup>C</sup>	鎌	F1	F1		F1
	pasam <sup>C</sup>	鋏	F1	F1		F1
	guçan <sup>C</sup>	杖	F1	F1		F1
	dadifu	木の一種	F1	F1		F1
	a:sa <sup>C</sup>	石蓴	F1	F1	F1	F1
	pindza <sup>C</sup>	山羊	F1	F1	F1	F1
	tçaban	茶碗	F1	F1		F1
funiŋ <sup>C</sup>	蜜柑		F1	F1	F1	
o:ŋi <sup>C</sup>	扇	F1			F2	

次に、ab型名詞の音調を表13に示す。観察されるパターンに基づきab型名詞を3つの語群に纏めることができる。第一の語群では、どの枠文でも2番目の韻律語にピッチの下降が生じる(F2)。後部要素がa型の動詞である場合、F2のパターンを2単位形として分析できないため、後部要素に実現する下降が前部要素の特徴によると解釈するほかはない。つまり、これらの語群はb型に分類される。この語群の中にA系列の語がたくさん含まれることに注意されたい。

第二の語群では、F2とF3の両方のパターンが見られる。しかし、F3が現れる環境は後部要素がa型の動詞に限る。この環境ではF3が実現しても2単位形としての解釈が成立しているため、前部要素の所属が判断できない。ただし、taku「蛸」mutsŋ「餅」、kabŋ「紙」は後部要素がa型でもF3の他にF2のパターンも現れるため、(発音の間違いでなければ)b型であると

表13 ab型名詞調査結果

対象語		X + mi: <sup>c</sup>	X + tuɿ <sup>c</sup>	X + vv <sup>a</sup>	X + ko: <sup>a</sup>	X + fo: <sup>a</sup>
ami <sup>A</sup>	飴	F2	F2	F2	F2	F2
katɕu: <sup>A</sup>	鯉	F2	F2	F2	F2	F2
nu:ma	馬	F2	F2	F2	F2	F2
mami <sup>B</sup>	豆	F2	F2	F2	F2	F2
mugɿ <sup>B</sup>	麦	F2	F2	F2	F2	F2
mm <sup>B</sup>	芋	F2	F2	F2	F2	F2
ki: <sup>B</sup>	木	F2	F2	F2	F2	
mnagu: <sup>A</sup>	砂	F2	F2	F2	F2	
isɿ <sup>A</sup>	石	F2	F2	F2	F2	
taki <sup>A</sup>	竹	F2	F2	F2	F2	
in <sup>B</sup>	犬	F2	F2	F2	F2	
avva <sup>B</sup>	油	F2	F2	F2	F2	
mta <sup>B</sup>	土	F2	F2	F2	F2	
ko:dzɿ <sup>A</sup>	麴	F2	F2	F2	F2	
sani <sup>B</sup>	種	F2	F2	F2	F2	
sanim <sup>A</sup>	月桃	F2	F2	F2	F2	
maju <sup>B</sup>	眉毛	F2	F2	F2	F2	
bu:gɿ	砂糖黍	F2	F2	F2		
mussu <sup>B</sup>	筵	F2	F2	F2		
fusa <sup>B</sup>	草	F2	F2		F2	
maɿ <sup>A</sup>	米	F2		F2	F2	F2
dzɿ: <sup>B</sup>	土地	F2		F2	F2	
ja: <sup>B</sup>	家	F2		F2	F2	
a: <sup>B</sup>	粟		F2	F2	F2	F2
sudi <sup>B</sup>	袖		F2	F2	F2	
ikja <sup>A</sup>	烏賊		F2	F2		F2
usɿ <sup>A</sup>	牛	F2	F2	F3	F3	F3
taku <sup>B</sup>	蝟	F2	F2	F2	F3	F3
mutsɿ <sup>A</sup>	餅	F2	F2	F2	F3	F2
midzɿ <sup>A</sup>	水	F2	F2	F3	F3	
tɕa: <sup>B</sup>	お茶	F2	F2	F3	F3	
kabɿ <sup>A</sup>	紙	F2	F2	F2	F3	
kan <sup>A</sup>	蟹	F2	F2	F3		F2
tuɿ <sup>A</sup>	鳥	F3	F3	F3	F3	F3
ɿzu <sup>A</sup>	魚	F3	F3	F3		

判断できる。

最後に、第三の語群では一貫して F3 のパターンが実現する。後部要素が c 型である場合、2 単位形としての解釈が成立しないため、これらの語は確実な a 型であると言える。結局、所属が未判定の語は第二語群の usɿ「牛」、midzɿ「水」、tɕa:「お茶」の 3 語のみとなっている。

以上、一般名詞について、単純名詞の環境においては 2 つのパターンしか対立しないのにも関わらず、複合アクセント法則が適用される、生産的に形成される複合語においては 3 つの対立するパターンが現れることが確認できた。つまり、地名と同様に ab 型の中に 2 つの異なるアクセント型 (a 型・b 型) が混在していることが言える。このように、(地名に見られる b2 型の位置付けをさておいて) 皆愛方言のアクセント体系を 3 型のアクセント体系として分析することが一般名詞に関する結果からも強く支持される。

### 5.3 考察

地名と一般名詞の調査を通じて、皆愛方言は 3 つのアクセント型が区別されることを示した。そこで、歴史的な考察を交えると良い。これまで a 型と認定できた名詞は A 系列 (tuɿ「鳥」、ɟzu「魚」、ja:ma「八重山」) に所属しているか、A 系列の前部要素を持つ複合語に由来する (pssara「平良」 < \*pira<sup>A</sup> + ra「平たい + 場所」、uidzɿ「上地」 < \*ue<sup>A</sup> + zi「上 + 地」か「植 + 地」、tanani:「棚根」 < \*tana<sup>A</sup> + ni:「棚 + 根」)。つまり、皆愛方言に見られる a 型と b 型の区別は古い区別の保持であることが言える。しかし、その反面に、A 系列に所属していながら、b 型に分類される語が多い (ami「飴」、isɿ「石」、ikja「烏賊」等)。この事実から、皆愛方言の (おそらく古くない) 先史において a 型の所属語彙の大部分が b 型に移行したと想定できる。この歴史的な背景を前提に、複合語の音調の共時的体系と b 型化の動機の 2 点について簡単な考察を加えておく。

本節 (5 節) ではもっぱら生産的に形成される複合語を対象にし、これら複合語の音調を元に前部要素のアクセント型の同定を行った。そこで、生産的に形成される複合語で見られる音調と、語彙的に登録されていそうな複合語で観察される音調が一致しているかどうかという疑問が起こる。当然ながら、ある複合語が語彙的に登録されているかどうかを客観的に判断することは難しいが、語彙的な複合語を特定する 1 つの近似法として「話者自身が辞書の項目として立項したいかどうか」という代用の規準を使うことができる<sup>24</sup>。このように、皆愛方言の語彙的な複合語の音調を検討してみると、非常に興味深い事実が浮上する。つまり、A 系列の語の中に、共時的には b 型化しているのにもかかわらず、それを含む語彙的な複合語は全て本来のパターンを保持している語が見付かる。A 系列に属している isɿ<sup>b/A</sup>「石」と maɿ<sup>b/A</sup>「米」は 5.2.2 節で報告した結果に従って、共時的に b 型に分類される。つまり、複合アクセント法則が適用される、生産的に形成される複合語においては F2 (つまり b 型) のパターンで実現している。しかし、この 2 語を前部要素とする語彙的な複合語は全て a 型の音調 (F0・F3) で実現している (44)(45)。

<sup>24</sup> 宮古語の場合は収録語が網羅的で、かつ話者自身が項目を決めた『伊良部方言辞典』(富浜 2013)と『多良間方言辞典』(渡久山・セリック 2020)に掲載されているかどうかという具体的な基準になる。

- (44)  $is\uparrow^{b/A}$  「石」を含む語彙的複合語 (「X + Y = GEN ...」における音調を示す)
- a.  $is\uparrow + gu:F^0$  「石+岩」
  - b.  $is\uparrow + kak\uparrow^{F0}$  「石+垣」
  - c.  $is\uparrow + ts\uparrow m^{F0}$  「石+積み」
  - d.  $is\uparrow + dzajafu^{F0}$  「石+大工」
- (45)  $ma\uparrow^{b/A}$  「米」を含む語彙的複合語 (「X + Y = GEN ...」における音調を示す)
- a.  $ma\uparrow + gu:F^0$  「米+粉」
  - b.  $ma\uparrow + ts\uparrow bu^{F0}$  「米+粒」
  - c.  $ma\uparrow + go:s\uparrow^{F0}$  「米+菓子」
  - d.  $ma\uparrow + ta:ra^{F0}$  「米+俵」

皆愛方言のこのようなデータは「複合アクセント法則」を考えるに当たって大きな意味を持ちうると考えられる。具体的に言うと、(44)と(45)に挙げられている複合語は複合アクセント法則が適用されておらず、その音調が語彙的な情報として登録されていると分析するほかはない。しかし、例えば、多良間方言のように単純名詞において a 型と b 型が合流していない方言であれば、これらの語彙的複合語はその音調が語彙的に登録されているとしても、複合アクセント法則が適用されているように見えてしまう。その結果、これらの方言においては複合アクセント法則の実際の適用範囲が過剰評価されてしまっている可能性が出てくる。皆愛方言は b 型化という歴史的な弾みによって、複合語に関する語彙的な情報の在り方を顕在化させている極めて重要なデータを提供してくれると言える。なお、皆愛方言のこの状況は語彙的な複合語の音調だけに基づいて共時的なアクセント型を判断することは適切な調査方法でないことも証明している。

続いて、a 型の所属語彙の大部分が b 型化している動機について次のように考えられる。a 型名詞の b 型化は皆愛方言のアクセント体系の構造からしてそもそも予測される現象である。なぜならば、単純名詞の環境においては a 型と b 型の対立が完全に中和しているため、a 型の習得が困難だと思われるからである。a 型を習得するには当然ながら非中和環境すなわち複合語の環境に頼らざるを得ないが、どの語でも（生産的に形成される）複合語の前部要素として頻繁に出現するとも限らない。逆に言うと、複合語の前部要素になることが稀な語は b 型の語とはほとんど対立しないため、b 型として習得される可能性が高い<sup>25</sup>。このように、b 型との合流には「複合語の前部要素としての出現度合い」が重要な要因として関わっていると仮定できる。

実はこの仮説の妥当性を実証することができる。宮古語の形容詞の主な修飾用法は名詞語根との複合語化であるため、形容詞は生産的に形成される複合語の前部要素になりやすい典型的な語群である。従って、上の仮説が正しければ、A 系列に所属している形容詞は b 型化せず、B 系列に所属している形容詞とは区別されることが予測される。著者の調査では予測通りの結果が得られているが、形容詞のアクセント体系に関する詳細な分析は別稿に譲る。

<sup>25</sup> それに対して、b 型名詞は含まれる文節が 1 つの韻律語から形成される環境を除いて、どの環境でも一貫した位置に下降が実現し、a 型に比べより「規則的」であるため、a 型と混同される可能性は低い。

以上、皆愛方言は共時的に3型のアクセント体系を持つことを示した。b2型の位置付けは難しく、それをアクセント体系の中に加える必要がある可能性があるが、現時点では十分なデータがない。それでは、A. 韻律語の単位がある、B. 3つのアクセント型が対立する、の2点を確認することができたので、漸くそれぞれのアクセント型の音韻的な解釈に挑む準備が整った。

## 6 各アクセント型の音韻的な解釈

本節では、各アクセント型の指定の在り方とその内容について音韻的な解釈を行う。第一に、6.1節では、c型とb型はそれぞれ1番目と2番目の韻律語に指定があるのに対して、a型は無指定のアクセント型として分析できることを示す。第二に、6.2では、アクセント型の指定の具体的な内容について現時点のデータに基づいた解釈を提示する。なお、本節では、「b型」はb1型を指す（ただし、2拍名詞はそもそもb1型・b2型の区別はない）。

### 6.1 各アクセント型の指定

各アクセント型の実現のまとめを表14（2拍名詞）と表15（3拍名詞）に提示する。

表14 2拍名詞の実現

環境	韻律語数	第一韻律語拍数	a型	b型	c型
単純環境 X = 接語 (=..)	1	3 $\mu$ ・4 $\mu$	F0	F0	F1
	2	2 $\mu$	F2	F2	F2
		3 $\mu$	F2	F2	F1
	3	2 $\mu$	F2	F2	F2
3 $\mu$		F2	F2	F1	
複合語環境 X+Y = 接語 (=..)	2	2 $\mu$	F0	F2	F2
	3		F3	F2	F2

表15 3拍名詞の実現

環境	韻律語数	第一韻律語拍数	a型	b型	c型
単純環境 X = 接語 (=..)	1	4 $\mu$ +	F0	F0	F1
	2	3 $\mu$ +	F2	F2	F1
	3	3 $\mu$ +	F2	F2	F1
複合語環境 X+Y = 接語 (=..)	2	3 $\mu$	F0	F2	F1
	3		F3	F2	F1

表層の実現を元にアクセント型の指定を解釈してみよう。c型名詞は、2拍の長さを持ちかつ第一の韻律語が2拍の長さであるという条件を除いて、一貫して1番目の韻律語にピッチの変動が実現している。そのため、1番目の韻律語にアクセントの指定があると解釈できる。同様

に、b 型名詞はアクセント単位が 1 つの韻律語から構成されるという条件を除いて、一貫して 2 番目の韻律語にピッチの変動があり、そこにアクセントの指定があることがわかる。これに対して、a 型名詞は単純名詞環境と複合語環境とで一貫しない実現を示している。すなわち、単純名詞の環境では、b 型と同じ実現を示しており、2 つ以上の韻律語があれば、2 番目の韻律語にピッチの下降が見られる。しかし、複合語の環境では、2 つの韻律語があってもピッチの下降が実現しない。一方、3 つの韻律語があれば、3 番目の韻律語にピッチの変動が実現する。これらの実現に対して、2 つの解釈が考えられる。第一に、複合語での実現を重視して、a 型は 3 番目の韻律語にアクセントの指定があると解釈する。第二に、a 型は無指定である。ただし、その場合、特定の環境において実現するピッチの変動がアクセント型に依らない現象であると考えなければならぬため、その現象の説明原理を導入する必要がある。

そのうち、第一の解釈は大きな問題を抱えている。その理由は次の通りである。この解釈によると、単純名詞の環境ではアクセント単位が 3 つの韻律語から構成されている場合、3 番目の韻律語のところにピッチの下降が実現することが予測される。しかし、予測に反して、この環境における a 型名詞のアクセントは 2 番目の韻律語に実現する。つまり、第一の解釈を採用すると単純名詞の環境における実現が説明できない。さらに、a 型は、複合語の環境において 2 番目の韻律語に指定がある b 型と対立しているため、2 番目の韻律語に指定があるという解釈も成り立たない。そこで、単純名詞と複合語の環境における実現をよく見ると、「文節において接語によって形成される最初の韻律語にピッチの変動がある」ことが共通していることがわかる。この共通点に対して 2 通りの見方をすることができる。1 つ目では「文節において接語によって形成される最初の韻律語にピッチの変動がある」こと自体が a 型の指定であると解釈する。2 つ目では接語によって形成される最初の韻律語にピッチの変動が現れるのは、無指定である a 型とは無関係で、自動的に挿入される境界音調によると想定する。

1 つ目の見方だと、アクセント型の指定について不整合が生じてしまう。つまり、この見方では、c 型と b 型の指定は「位置」の指定であるが、a 型の指定は「位置」ではなく、文節における一種の「境界」の指定となる。2 つ目の見方だと、a 型と b 型によって指定されている音調と同じ実現（当該韻律語の次末拍の直前におけるピッチの下降）をする境界音調を想定しなければならない。現時点では十分なデータがないため、どの見方がより説明力が高いかを判断することはできない。恣意的ながら、ここでは境界音調の分析を暫時的に採用しておく。それに従って、4.2.3 節で行った各アクセント型の解釈を(46)のように訂正することができる。

- (46) a. c 型は 1 番目の韻律語にピッチの下降が指定されている。  
 b. b 型は 2 番目の韻律語にピッチの下降が指定されている。  
 c. a 型は無指定である。  
 d. 当該の文節においてアクセント型による音調の指定がなければ、接語によって形成される最初の韻律語にピッチの下降を実現させる。

ここでは「ピッチの下降」を下げ核 (H\*L) の一種とみなしておく。次節では、各アクセント

型の具体的な解釈について述べる。

## 6.2 各アクセント型の具体的な解釈

### 6.2.1 文節頭の高さの解釈

まず、c型の2拍名詞の実現に着目しながら、文節が高く始まることに関する解釈を行う。これまで見てきたアクセント資料は全て対象の名詞を含む文節が高く始まっている。対象の名詞を含む文節は発話頭の位置に立っているが、後続する述語句も全て高く始まっているため(47)、文節が高く始まることは発話頭の環境に限らないことがわかる。なお、句末境界高音調が挿入されていない場合でも、後続する文節が高く始まる(48)ので、後続する文節が高く始まることは先行する文節の(オプションな)句末境界高音調の挿入による結果ではないことも明らかである。

(47) ((15a)に挙げたアクセント資料)

- a. midz<sub>1</sub><sup>ab</sup> = n]kai = maí zzi<sup>c</sup>-]ta: 「水 = DIR = INC 入れる-PST」  
 b. mug<sub>1</sub><sup>b</sup> = n]kai = maí zzi<sup>c</sup>-]ta: 「麦 = DIR = INC 入れる-PST」  
 c. nabi<sup>c</sup> = ]nkai = maí zzi<sup>c</sup>-]ta: 「鍋 = DIR = INC 入れる-PST」

- (48) a. ira]v<sup>b2</sup> = vu [mju:<sup>c</sup>-]di 「伊良部 = ACC 見る-VOL」  
 b. o:]g<sub>1</sub><sup>c</sup> = zu [ka:<sup>a</sup>-]di 「扇 = DIR = INC 買う-VOL」

各文節が高く始まることに対して2つの解釈が考えられる。第一に、各文節の頭に高音調が指定されていると解釈する。第二に、デフォルトの高さが高いと想定した上で、文節ごとにピッチがデフォルトの高さにリセットされると解釈する。そのうち、第二の解釈が2拍のc型名詞の実現を説明できず、却下されるべきである。その理由は次の通りである。4.2.3節で見たように、アクセント型によって指定されるピッチの下降(下げ核)は当該韻律語の次末拍の直前に実現する。ただし、2拍のc型名詞に韻律語を形成する2拍の接語が後続すると、1番目の韻律語が2拍という不十分な長さになってしまう結果、c型のピッチの下降が次の韻律語に実現する(49a)。これに対して、c型名詞に1拍の接語が付き、1番目の韻律語が3拍である場合は、十分な長さがあり、下げ核が文節の初頭拍に来るため、1番目の韻律語にピッチの下降が実現すると予測される。しかし、ピッチの下降は予測される次末拍の直前ではなく、末尾拍の直前に実現する(49b)。つまり、下げ核が1拍へ右にずれていると解釈しなければならない。文節の初頭拍については何の指定もなければ、つまり、各文節の頭にピッチがデフォルトの高さにリセットされると解釈を採用すれば、このずれが全く説明できない。

- (49) a. (μμ<sup>c</sup>) = (μ]μ = μ) ...  
 b. (μμ<sup>c</sup> = ]μ) = (μμ = μ) ... †(μ]μ<sup>c</sup> = μ) = (μμ = μ) ...

逆に、文節の初頭拍に句境界の高音調(%H)が指定されると想定すれば、下げ核のずれを次

のように説明することができる。つまり、c型名詞を含む韻律語が3拍である場合は句境界の高音調と下げ核が同じ拍に結び付くことになる。同じ拍に2つの高音調が結びつきえないという制約を想定すれば、下げ核が次の拍にずれるという現象が説明できる(図2、なお、下げ核が実現した後、低音調が拡張していくと想定する)。

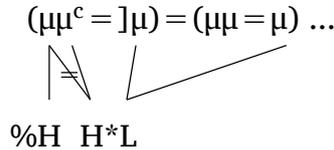


図2 下げ核のずれ

以上のことに従って、各文節の初頭拍に句境界の高音調が挿入されることを想定する。なお、文節頭に指定されるこの高音調については「文節頭高音調拡張規則」を導入する必要がある。すなわち、文節頭に指定される高音調はアクセント型によって指定される下げ核まで右へと韻律語の境界を越えて拡張していく。無核の場合は文節全体が高くなる(図3)。

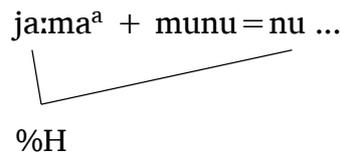


図3 文節頭高音調の拡張規則例

### 6.2.2 各アクセントの解釈

まず、下げ核の位置指定について述べる。以上見てきたように、c型とb型によって指定されるピッチの下降は当該韻律語の次末拍の直前に実現する。これはつまり、下げ核が指定の韻律語の次々末拍に結び付くことになる。しかし、2拍の接語がb型名詞に付くときのパターンなどからすると、「指定の韻律語の末尾境界から3拍目の拍に結び付く」という記述の方が正確であることが分かる。例えば、(50)に挙げる例において、b型によって指定されている下げ核は2番目の韻律語の末尾境界から3拍目、つまり、1番目の韻律語の末尾拍にある。よって、下げ核の位置は「指定される韻律語の末尾境界から数えて3拍目にある」と記述するべきである。ここで重要なのは下げ核が必ずしも指定される韻律語の中に位置しないことである。それでは、3つのアクセント型の表層の実現が基底の指定に最も近い実現環境を図4に示す。

(50) (kagam<sup>b</sup>) = (]kará) ... 「鏡 = ABL ...」

(46)で示した解釈と上の下げ核の定義では、a型やb型の実現は特に問題がないが、c型の短い名詞の実現も説明できるかを見る必要がある。そこで、2つのケースが問題となりうる。まず、c型の2拍名詞に韻律語を形成する2拍の接語が後続する場合、下げ核は1番目の韻律語

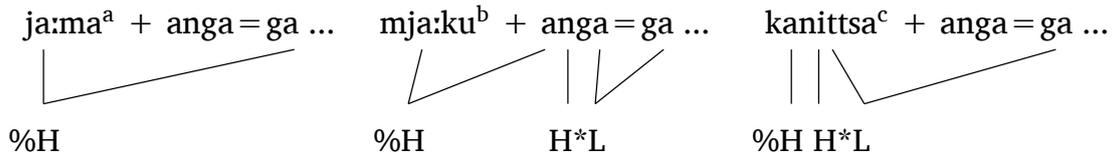


図4 各アクセント型の音韻的解釈

ではなく、2番目の韻律語の末尾境界から3拍目のところに実現する。これについては、明白な動機があると言える。つまり、1番目の韻律語の末尾境界から3拍を数えると拍自体がないため、アクセント型で指定される下げ核は結びつきえないことになる。その解決策として、韻律語を単位とした右方移動が行われ、2番目の韻律語の末尾境界から3拍目の拍に下げ核が実現する(図5)。下げ核のこのような移動は拍を単位としていないことが明らかである。なぜならば、後続の韻律語の長さを増やすにつれて、c型で指定される下げ核が右へとずれていくからである。詳しく言うと、下げ核がもし、拍を単位に移動していたならば、後続する韻律語の長さにもかかわらず、次の拍、すなわち後続する韻律語の1番目の拍に結びつくと予測される。しかし、実際は下げ核の実現する位置が後続の韻律語の長さに従って変動するので、右方移動が韻律語を単位としていると解釈せざるをえない。

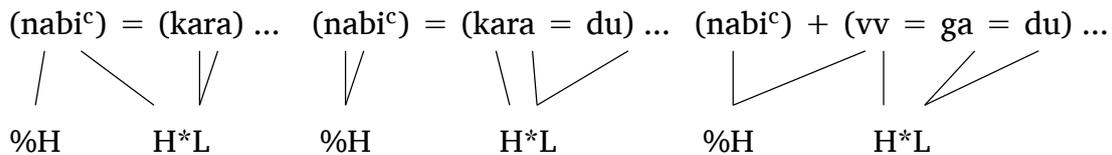


図5 c型名詞における下げ核の右方移動

次のケースはc型名詞が含まれている韻律語が3拍である条件に該当する。このケースについては、前節で詳しく論じた。つまり、c型名詞が含まれている韻律語が3拍であると、文節頭の句境界音調と下げ核が同じ拍に結びつく結果、下げ核が次の拍に移動し、実現する。

以上、各アクセント型の解釈をまとめると、次のようになる。

- c型は1つ目の韻律語に下げ核を持つ。
- b型は2つ目の韻律語に下げ核を持つ。
- a型は無核である。
- 下げ核は指定される韻律語の末尾境界から数えて3拍目に位置する。

さらに、皆愛方言のプロソディーを記述するために、次のような記述を加える必要がある。

- 文節の初頭拍に句境界の高音調が義務的に挿入される。
- 文節の初頭拍に挿入される高音調は下げ核が結びつく直前の拍まで右へと拡張する。
- 文節が無核である場合、接語によって形成される最初の韻律語に下げ核が付与される。
- 高音調と下げ核が同じ拍に結びつくとき、下げ核が次の拍に移動する。

- 下げ核はそれが結びつきえる拍がない場合は次の韻律語に移動する。
- 文節の末尾拍に任意的な高音調が付与される。

なお、皆愛方言の下げ核について、異なる単位（拍・韻律語）に基づく2種類の移動を想定しなければならないことが特に重要な意味を持つ可能性がある。

## 7 おわりに

本研究では皆愛方言のアクセント体系に関する予備的な報告を行い、次の点を明らかにした。すなわち、第一に、宮古語の他の方言と同様に「韻律語」という単位を想定する必要がある。第二に、単純名詞の環境では2つの音調しか現れないのにもかかわらず、複合アクセント法則が適用される、生産的に形成される複合語の環境では3つの対立する音調が実現することを示した。この結果に従って、皆愛方言は3種類のアクセント型が区別されることを論じた。第三に、各アクセント型について現時点のデータに基づいた音韻的な解釈を提示した。今後の課題として形容詞・動詞などのアクセント体系の解明がある。

## 参考文献

- 青井隼人 (2016) 「南琉球宮古語多良間方言の音声学的・音韻論的構造の諸相」 博士論文 (未公刊), 東京外国語大学.
- 五十嵐陽介 (2015) 「南琉球宮古語多良間方言のアクセント型の記述」 『比較日本文化学研究』 (8), 1-42.
- 五十嵐陽介 (2016a) 「アクセント型の対応に基づいて日琉祖語を再建するための語彙リスト「日琉類別語彙」」 日本語学会 2016 年度春季大会予稿集, 233-238., 日本語学会.
- 五十嵐陽介 (2016b) 「南琉球宮古語池間方言・多良間方言の韻律構造」 『言語研究』 (150), 33-57.
- 五十嵐陽介 (2018) 「3 拍名詞第 4 類における本土日本語と琉球語間の 1 対 2 のアクセント型の対応について」 「対照言語学の観点から見た日本語の音声と文法」 研究発表会, 琉球語のアクセント.
- Igarashi, Y., Takubo, Y., Hayashi, Y., & Kubo, T. (2018). Tonal neutralization in the Ikema dialect of Miyako Ryukyuan. In K. Haruo, & G. Mikio (Eds.), *Tonal change and neutralization*. Walter de Gruyter GmbH & Co KG. pp. 83-128.
- 上野善道 (2006) 「日本語アクセントの再建」 『言語研究』 130, 1-42.
- 上野善道 (2012) 「N 型アクセントとは何か」 『音声研究』 16 (1), 44-62.
- 大山成子 (1962) 「琉球方言における二音節名詞のアクセント」 『琉球方言』 4, 3-56.
- セリック・ケナン (2018) 「南琉球宮古語下地皆愛方言一簡略記述・談話資料・語彙集一」 『言語記述論集』 10, pp. 97-249.
- セリック・ケナン (2020a) 「南琉球宮古語史」 博士論文 (未公刊), 京都大学.
- セリック・ケナン (2020b) 「南琉球宮古語多良間仲筋方言における「複合アクセント法則」の再検討」 日本言語学会第 160 回大会予稿集, 293-299.

- セリック・ケナン (2020c) 「南琉球宮古語水納島方言のアクセント体系と基礎語彙」 『琉球の方言』 45, 243–281.
- セリック・ケナン (2021) 「琉球宮古語多良間方言のアクセント体系は四型であって、三型ではない」 第 217 回 NINJAL サロン発表資料.
- セリック・ケナン・青井隼人 (印刷中) 「多良間方言の韻律構造の解明に向けて——動詞進行融合形の音調の記述とその分析——」 『国立国語研究所論』 21, .
- 渡久山春英・セリック・ケナン (2020) 『南琉球宮古語多良間方言辞典』 国立国語研究所.
- 富浜定吉 (2013) 『宮古伊良部方言辞典』 沖縄タイムス社.
- 畑聰一郎 (1983) 「宮古島皆愛集落の成立と解体・再編成: シマ観念の考察」 『人文地理』 35 (1), 66–78.
- 服部四郎 (1959) 『日本語の系統』 岩波書店.
- 服部四郎 (1979a) 「日本祖語について (21)」 『月刊言語』 8 (11), 97–107.
- 服部四郎 (1979b) 「日本祖語について (22)」 『月刊言語』 8 (12), 100–114.
- 松森晶子 (1998) 「琉球アクセントの歴史的形成過程—類別語彙 2 拍語の特異な合流の仕方を手がかりに」 『言語研究』 (114), 85–114.
- 松森晶子 (2000a) 「琉球アクセント調査のための類別語彙の開発: 沖永良部島の調査から」 『音声研究』 4 (1), 61–71.
- 松森晶子 (2000b) 「琉球の多型アクセント体系についての一考察—琉球祖語における類別語彙 3 拍語の合流の仕方」 『国語学』 51 (1), 93–108.
- 松森晶子 (2010) 「多良間島の 3 型アクセントと「系列別語彙」」 上野善道 (編) 『日本語研究の 12 章』 明治書院 pp. 490–503.
- 松森晶子 (2012) 「琉球語調査用「系列別語彙」の素案」 『音声研究』 16 (1), 30–40.
- 松森晶子 (2013) 「宮古島における 3 型アクセント体系の発見: 与那覇方言の場合」 『国立国語研究所論集』 (6), 67–92.
- 松森晶子 (2014) 「多良間島のアクセント規則を再検討する」 『日本女子大学紀要 文学部』 (63), 13–36.
- 松森晶子 (2015) 「南琉球の三型アクセント体系: その韻律単位に関する考察」 『日本女子大学紀要. 文学部』 (64), 55–92.
- Matsumori, A. (2019). Prosodic Unit, Recursive Structure, and Nature of Accent in Miyako Ryukyuan. *The Linguistic Review*, 36 (1), 51–83.

## 略号一覧

ABL	.....	ablative	DIR	.....	directional
ACC	.....	accusative	EMPH	.....	emphatic
DAT	.....	dative	FOC	.....	focus
DIM	.....	diminutive	GEN	.....	genitive

HORT	hortative	PST	past
INC	inclusive	PURP	purposive
NOM	nominative	QUOT	quotation
NML	nominal	VOL	volitive
NMLZ	nominalizer		

受理日 2021 年 4 月 13 日

## 付録：アクセント資料

本付録では、これまで収集した名詞のアクセント資料のうち「X=GEN 話 =ACC ...」の粹文で調べた名詞を掲載する（合計 1351 点）。アクセント資料の書き起こしと対象名詞の意味記述を示す。なお、ピッチの下降の位置が遅れて聞こえるアクセント資料がしばしばあった。聞き取った通りに、つまり、遅れた位置で ] の記号を付与したが、これらのアクセント資料については更なる検討が必要である可能性がある。本付録はあくまで皆愛方言の所属語彙の情報を提示するためのものである。

a:]nu panassu ...	粟。
a:]gunu panassu ...	歌。
a:sa]nu panas[su ...	石蓐（あおさ）。
abariganama]nu panassu ...	暴れた髪。
abarija:]nu panassu ...	荒れ果てた家。
aba]sanu panassu ...	ハリセンボン。
aba]sago:ranu panassu ...	ニガウリの一種。
abunu panas]su ...	洞窟。
a:bu]kunu panassu ...	泡。
açi]nu panassu ...	昼食。
açinu panas]su ...	汗。
açimnu panas]su ...	汗疹（あせも）。
ada]nnu panassu ...	阿檀（あだん）。
adana]s̄nu panassu ...	アダンの気根。
adunu panas]su ...	踵（かかと）。
adza]ga panassu ...	兄。
adza]nu panassu ...	黒子（ほくろ）。
adziba:]nu panassu ...	八重歯。
adz]nu panas]su ...	味。
afu]nu panassu ...	ケーキの一種。
afuk]nu panassu ...	欠伸（あくび）。

afutanu panas]su ...	(サトウキビなどの) 枯れた、乾燥した葉っぱ。
aganja:]nu panassu ...	東隣の家。
aga]nu panas]su ...	東。
aga]dz]mu] ]nu ]panassu ...	東地盛。
aga]ts]mma:]nu panassu ...	東積間。
aga]wa:]ranu panas]su ...	上座。
aga]tanu panassu ...	遠い。
agu]nu panassu ...	同級生。
agu]nu panassu ...	顎 (あご)。
aidzu:]nu panas]su ...	野菜の和え物。
akama]nu panas]su ...	赤飯。
akana:]nu panas]su ...	紫蘇 (しそ)。
akanazzunu panas]su ...	魚の一種。
aka]nu panas]su ...	明り。
aka]sa]nu panassu ...	私生児。
aka]ts]nu panas]su ...	血。
aka]ts]nu mts]n] ]panassu ...	血管。
akavvanu panas]su ...	赤ちゃん。
akja:]danu panassu ...	仲買人。
ako:]ngi:]nu panas]su ...	木の一種。
ak]na]nu panas]su ...	商い。
amnu panas]su ...	網。
ama]mnu panassu ...	宿借 (やどかり)。
ama]mbuninu panassu ...	踝骨 (くるぶし)。
aminu panas]su ...	雨。
aminu panas]su ...	飴。
amif]nu panas]su ...	雨降り。
ananu panas]su ...	穴。
anissunu panas]su ...	年上。
an]naga panassu ...	母。
an]naujanu panassu ...	両親。
an]gaga panassu ...	年上の女性。
aparagimu]nunu panassu ...	美人。
ara:]nu panassu ...	外。
arabarinu panas]su ...	新しい畑。
araf]kunu panas]su ...	新しい服。
aragurumanu panas]su ...	新車。

aragus]kunu panassu ...	新城 (あらぐすく)。
araiçanu panas]su ...	新しい医者。
araja:nu panas]su ...	新築。
araka:]nu panassu ...	新しい井戸。
arakagam]nu panassu ...	新しい鏡。
araku]ts]nu panas]su ...	新しい靴。
aramju:turanu panas]su ...	新婚の夫婦。
aramts]nu panas]su ...	新しい道。
aranabinu panas]su ...	新しい鍋。
araraga]manu panassu ...	なにくそ。
arasanag]nu panas]su ...	新しい禪。
asaim]nu panassu ...	遠浅。
asammaga panas]su ...	親。
asamunu]nu panassu ...	朝食。
asatti]nu panassu ...	明後日。
atsa]nu panassu ...	明日。
attsa]nu panassu ...	下駄。
attsanu panas]su ...	端。
atu]nu panassu ...	後。
atuduminu panas]su ...	後添いの妻。
avvamtsu]nu panassu ...	油味噌。
avvanu panas]su ...	油。
avvafaja]nu panassu ...	燃費が悪いこと。
avvafu]ts]nu panassu ...	言葉が滑らかで味がある。
baga panas]su ...	私。
ba:]kinu panassu ...	籠の一種。
baça]nu panassu ...	馬車。
baçi]nu panassu ...	間。
baçigama]nu panassu ...	間 (あいだ)。
bakag]za]nu panassu ...	キシノウエトカゲ。
bakajuminí ]panassu ...	若い嫁。
bakamununu panas]su ...	若者。
bakibun]nu panassu ...	取り分。
bakidama]nu panassu ...	取り分。
bako:mja]:nu panassu ...	奪い合い。
bak]da]nu panassu ...	脇。
bambura]nu panassu ...	玩具 (おもちゃ)。

bandz̄nu panas]su ...	盛り。
ban]taga panas]su ...	(聞き手を除いた) 私たち。
bant̄i]ranu panassu ...	ばんしろう。
banguminu panas]su ...	番組。
barinu panas]su ...	割れ。
bas̄]nu panassu ...	バス。
baso]:nu panassu ...	芭蕉。
batanu panas]su ...	お腹。
batabuni]nu panassu ...	お腹の筋肉。
bats̄]nu panassu ...	罰。
bidu]nu panassu ...	餌。
bikidum = nu panas]su ...	男。
bikidu]nu panas]su ...	雄鶏。
bikiinnu panas]su ...	雄の犬。
bikimaju]nu panassu ...	雄の猫。
bikimununu panas]su ...	雄。
bikinu:manu panas]su ...	雄の馬。
bikipavnu panas]su ...	雄の蛇。
bikipindzanu panas]su ...	雄の山羊。
bikius̄]nu panassu ...	雄の牛。
bikivvanu panas]su ...	息子。
bju:]nu panassu ...	蜻蛉 (とんぼ)。
bo:]nu panassu ...	棒。
bo:]çinu panassu ...	帽子。
bo:t̄çirimunu]nu panassu ...	悪戯っ子。
botu]runu panassu ...	ボトル。
b̄]:nigarap̄tunu panas]su ...	いつまでも居座って中々家に帰らない人。
b̄]:r̄nu panas]su ...	座る椅子。
b̄]:r̄nu mi:]nu panassu ...	奥まったところ。
b̄]:tapaginu panassu ...	完全に禿。
bu:nu panas]su ...	緒。
bu:ḡnu panas]su ...	砂糖黍 (さとうきび)。
bu:ḡd̄ainu panas]su ...	砂糖黍を納めた金額。
bu:]r̄janu panassu ...	同年性。
buba]ga panassu ...	おば。
budu]nu panas]su ...	踊り。
budza]ga panassu ...	おじ。

bugarino:]sɲnu panassu ...	疲労治し。
buinu panas]su ...	有給労働。
buranu panas]su ...	保良。
buranu panas]su ...	法螺貝。
burafɯkjanu panas]su ...	法螺吹き。
burakunu panas]su ...	部落。
buttira]nu panassu ...	チャンプルー。
butunu panas]su ...	夫。
butɯtuɲ]nu panassu ...	一昨日。
ɕa:kanu panas]su ...	未明。
ɕa:ranu panas]su ...	畑の石を集めてそれを石積にしたもの。
ɕi:ninnu panas]su ...	青年。
ɕi:ninadza]ga panassu ...	青年。
ɕi:to:ja:]nu panassu ...	製糖屋、製糖を行う場所、家。
ɕi:dunu panas]su ...	生徒。
ɕibananu panas]su ...	(海辺の) 岩。
ɕiga]tsɲnu panassu ...	四月。
ɕimodzɪnu panas]su ...	下地 (しもじ)。
ɕinnu panas]su ...	線。
ɕina]nu panassu ...	二枚貝。
ɕin]ɕiga panassu ...	先生。
ɕitɕidzi]nu panassu ...	七時。
ɕitɕiga]tsɲnu panassu ...	七月。
ɕiwanu panas]su ...	心配。
ɕiwagutunu panas]su ...	心配事。
ɕo:gakko]:nu panassu ...	小学校。
ɕo:ga]tsɲnu panas]su ...	正月。
ɕodzɔ]nu panassu ...	処女。
ɕu:]ga panassu ...	祖父。
ɕɯkupaginu panas]su ...	無職。
ɕɯkupagibikidumnu panas]su ...	無職の男性。
ɕɯkupagimidumnu panas]su ...	無職の女性。
dadifu]nu panassu ...	木の種類。
dadzɲ]manu panassu ...	皺 (しわ)。
dai]nu panassu ...	値段。
daigakunu panas]su ...	大学。
danka:nu panas]su ...	相談。

dara]funu panassu ...	嘘。
dara]kanu panassu ...	嘘。
den]shanu panassu ...	電車。
dikibuts]nu panassu ...	優秀な人。
dikija:]nu panassu ...	できる人。
do:bats]nu panas]su ...	蜂の一種。
do:]vnu panassu ...	道具。
dojo:binu panas]su ...	土曜日。
du:]nu panassu ...	体。
du:]ga panassu ...	自分。
du:buni]nu panassu ...	体の骨。
du:kąttinu panas]su ...	自分勝手。
du:]taga panassu ...	私たち。
du:umu]nń panas]su ...	思い込み。
dukjanu panas]su ...	皮膚病の一種。
durunu panas]su ...	泥。
du]nu panas]su ...	友達。
dza:]nu panassu ...	座。
dzaka]nu panassu ...	ジャコウネズミ。
dzavka]ninu panassu ...	グミ。
dzinnu panas]su ...	お膳。
dzimbu]nnu panassu ...	分別。
dzinfuku]runu panassu ...	財布。
dzinmo:]kinu panassu ...	金儲け。
dzinmu]tçanu panassu ...	金持ちな人。
dzo:]nu panassu ...	門。
dzo:fųts]nu panassu ...	(屋敷の) 入口。
dzo:wa:ts]k]nu panassu ...	いい天気。
dz:]nu panas]su ...	文字。
dz:]nu panas]su ...	土地。
dz]gu:]runu panassu ...	独楽。
dz]ma]minu panassu ...	落花生。
dz]mu]nu panassu ...	地盛。
dz]nannu panas]su ...	次男。
dz]vnu panas]su ...	芯。
dzu:nu panas]su ...	尻尾。
dzu:dzi]nu panassu ...	十時。

dzu:ga]tsɿnu panassu ...	十月。
dzu:guuja]nu panassu ...	十五夜。
dzu:itçidzi]nu panassu ...	十一時。
dzu:itsɿga]tsɿnu panassu ...	十一月。
dzu:kççimun]unu panassu ...	しょっちゅう忘れ物をする人。
dzu:nidziní ]panassu ...	十二時。
dzu:niga]tsɿnu panassu ...	十二月。
dzu:rukuni]tsɿnu panassu ...	十六日。
dzunçanu panas]su ...	巡查。
dzurinu panas]su ...	酌婦。
ffanu panas]su ...	子供。
ffagama]nu panassu ...	小さい子供。
ffainu panas]su ...	堆肥。
ffajo:mní panas]su ...	暗闇。
ffammaganu panas]su ...	子供と孫。
ffanasɿnu panas]su ...	出産。
ffatsɿnu panas]su ...	鋤。
ffinu panas]su ...	烏賊や蛸の墨。
ffi]manu panassu ...	来間。
ffimadzɿma]nu panassu ...	来間島。
ffu]nu panassu ...	櫛。
ffuçi:]sanu panassu ...	黒い斑点。
ffuşata]nu panassu ...	黒砂糖。
ffuga:]nu panassu ...	黒肌。
ffuşmda:]ranu panassu ...	(顔などが) まっ黒。
ffutin]kunu panassu ...	煤。
ffutsɿku]mnu panassu ...	痣(あざ)。
fo:mununu panas]su ...	食べ物。
fuçinu panas]su ...	癖。
fuçibamununu panas]su ...	癖のある人。
fuçibapɿtunu panas]su ...	曲者(くせもの)。
fudzɿ]nu panassu ...	籤(くじ)。
fudzɿbɿkɿ]nu panassu ...	籤引き。
fugɿnu panas]su ...	首。
fugɿnu panas]su ...	釘。
fuguɿnu panas]su ...	陰囊。
fujunu panas]su ...	冬。

fukja]ginu panassu ...	お萩。
fuku]nu panassu ...	服。
fukunu panas]su ...	肺。
fukurunu panas]su ...	袋。
funai]nu panassu ...	船酔い。
funi]nu panassu ...	船。
funi]nu panassu ...	蜜柑。
fuj]nu panassu ...	豚小屋。
fura]nu panassu ...	鞍。
fujza:]nu panassu ...	古い家。
fusanu panas]su ...	草。
fusaka]nu panassu ...	草刈。
fusamunu]nu panassu ...	臭いもの。
fusunu panas]su ...	糞。
fusuganama]rjanu panassu ...	糞頭。
fusu]nu panassu ...	葉。
futanu panas]su ...	蓋。
futa:ŋga panas]su ...	二人。
futa:ts]nu panas]su ...	二つ。
futaganu panas]su ...	双子。
futagavvanu panas]su ...	双子。
futainu panas]su ...	額。
futakaranu panas]su ...	二匹。
futakivnu panas]su ...	二軒。
futaku:nu panas]su ...	二個。
futamatanu panas]su ...	(要意味確認)。
futannu panas]su ...	二回。
futati:nu panas]su ...	二年。
futɕiba:]nu panassu ...	虫歯。
futs]nu panas]su ...	向き。
futs]bi:]nu panassu ...	指笛。
futs]kanu panas]su ...	二日 (ふつか)。
ga:na]nu panassu ...	家鴨 (あひる)。
ga:na]nu panassu ...	蝉。
ga:ngu]nu panassu ...	蛭。
ga:ra]nu panassu ...	魚の一種。
gabadza:]runu panassu ...	大きい蟻螂。

gabafuſarikadzanu panas]su ...	加齡臭。
gabaıçanu panas]su ...	老人の医者。
gagamju:turanu panas]su ...	老夫婦。
gadzam]nu panassu ...	蚊。
gadzimunu]nu panassu ...	反抗的な発言。
gag]nu panas]su ...	鉤。
gag]na]:nu panassu ...	草の一種。
gaitçi]nnu panassu ...	ヒバリ。
gajandanu panas]su ...	蜂の一種。
gajandabats]nu panassu ...	蜂の一種。
gakko:]nu panassu ...	学校。
gak]nu panas]su ...	食いしん坊。
gak]munu]nu panassu ...	食いしん坊。
gakumo]nnu panassu ...	学問。
gamma]rjanu panassu ...	悪戯をする人。
gandzu]:nu panassu ...	健康。
gamma]rip]tunu panassu ...	悪戯をする人。
gara]sanu panassu ...	烏。
gara]sabavnu panassu ...	蛇の一種。
genannu panas]su ...	下男。
gets]jo:binu panas]su ...	月曜日。
go:]ranu panassu ...	苦瓜。
godzi]nu panassu ...	五時。
godzu:]nu panassu ...	五十。
goga]ts]nu panassu ...	五月。
g]:]panu panassu ...	簪 (かんざし)。
g]s]k]nu panassu ...	薄 (ススキ)。
gu:]nu panassu ...	(海中の) 岩。
guçan]nu panassu ...	杖。
guçi]nnu panassu ...	女性器。
gudunnu panas]su ...	愚鈍。
gumadzi]nnu panassu ...	小銭。
gumi]nu panassu ...	ゴミ。
gumugama]nu panassu ...	ゴム。
gus]ku]benu panassu ...	城辺 (ぐすくべ)。
haçidzi]nu panassu ...	八時。
haçidzu:]nu panassu ...	八十。

h̄at̄çiga]ts̄nu panassu ...	八月。
heja]nu panassu ...	部屋。
h̄iko:]kinu panassu ...	飛行機。
h̄isama]ts̄nu panassu ...	久松。
h̄jaku]nu panassu ...	百。
i:nu panas]su ...	鱒 (えい)。
i:ka:ginu panas]su ...	顔がきれいであること。
ibigu:]nu panassu ...	植え替え。
içanu panas]su ...	医者。
idiba:]nu panassu ...	出っ歯。
idif̄u]ts̄nu panassu ...	出口。
idz̄nu panas]su ...	元気。
if̄ukanu panas]su ...	何日。
ifun]nu panassuga ...	何度。
if̄usanu panas]su ...	争い、戦争。
if̄yta:]ga panassuga ...	何人 (なんにん)。
if̄ytinu panas]suga ...	何年。
if̄uts̄nu panas]su[ga ...	幾つ。
ikjanu panas]su ...	烏賊 (いか)。
̄k̄mus̄nu panas]su ...	生き物。
im]nu panassu ...	海。
imazzunu panas]su ...	新鮮な魚。
imbatanu panas]su ...	海辺。
imbo:nu panas]su ...	漁師。
imça:nu panas]su ...	漁師。
imsanits̄nu panas]su ...	海神祭。
imd̄zmanu panas]su ...	海辺の村、漁村。
imi]nu panassu ...	夢。
imiço:ga]ts̄nu panassu ...	少正月。
imidz̄]:nu panassu ...	貧乳。
imi]s̄nu panassu ...	お箸。
imma]radaninu panassu ...	(腿の付け根にある) リンパ腺。
imnān̄í panas]su ...	海鳴り。
innu panas]su ...	犬。
indzu:nu panas]su ...	犬汁。
innuma]ras̄atunu panassu ...	洲鎌にある集落名。
ipuga]nu panassu ...	どれぐらい大きい。

irav]nu panassu ...	伊良部。
iravdzɪma]nu panassu ...	伊良部島。
iravmma]rinu panassu ...	伊良部島出身。
iriju:nu panas]su ...	必要な物。
iru]nu panassu ...	色。
isəkunu panas]su ...	咳。
isarafu]gu[nu ]panassu ...	石原窪。
isara]fu[gufu]tsɪ[nu ]panas[su ...	石原窪方言。
isara]fugummarinu panassu ...	石原窪出身。
isɪnu panas]su ...	石。
isɪdzajafunu panas]su ...	石大工。
isɪgakɪnɪ panas]su ...	石垣。
isɪku:nu panas]su ...	岩盤。
isɪtsɪmnu panas]su ...	石積み。
itanu panas]su ...	板。
itɛidzi]nu panassu ...	一時。
itɛiga]tsɪnu panassu ...	一月。
itsɪnu panas]su[ga ...	何時 (いつ)。
itsɪban]nu panassu ...	一番。
itsɪbandza:]nu panassu ...	一番座。
itsɪkanu panas]su ...	五日 (いつか)。
itsɪkara]nu panassu ...	五匹。
itsɪkiv]nu panassu ...	五軒。
itsɪku:]nu panassu ...	五個。
itsɪ]nu pɪtunu panassu ...	五人。
itsɪti:]nu panassu ...	五年。
itsɪtsɪ]nu panassu ...	五つ。
itsɪfunu panas]su ...	いところ。
ja:nu panas]su ...	家。
ja:ɕɕu:nu panas]su ...	凶年。
ja:]dinu panassu ...	家族。
ja:dzɪminu panas]su ...	守宮 (やもり)。
ja:fɪ]kɪ[nu ]panassu ...	家葺き。
ja:kɪ]sɪnu panassu ...	引っ越し。
ja:manu panas]su ...	八重山。
ja:mafɪtsɪnu panas]su ...	八重山方言。
ja:mu]tunu panassu ...	本家。

ja:]ninu panassu ...	来年。
ja:nu ui]nu panassu ...	屋根。
ja:nu pɿtunu panas]su ...	八人。
jati:nu panas]su ...	八年。
ja:tsɿnu panas]su ...	八つ。
jadunu panas]su ...	戸。
jadubasɿnɿ ]panassu ...	雨戸。
jadujum]nu panassu ...	口喧嘩。
jadumu]janu panassu ...	水字貝。
jafu]nu panassu ...	厄 (やく)。
jagu]inu panassu ...	どなっている声。
jaimandanu panas]su ...	非常にやせている人。
jakadzɿma:]rjanu panassu ...	しょっちゅうあちこちに行く人。
jakaranu panas]sɿ ...	八匹。
jakku]n[nu ]panassu ...	薬缶。
jaku:nu panas]su ...	八個。
jam]nu panassu ...	痛み。
jamanu panas]su ...	林。
jamanu panas]su ...	鋤 (すき)。
agai jamadatsinu panas]su ...	下痢。
jamai]n[nu ]panassu ...	野良犬。
jamamaju]nu panassu ...	野良猫。
jamamun]nu panassu ...	山桃。
jama]tunu panas[su ...	大和。
jamatudza]ni[nu ]panassu ...	日系。
jamatɿfɿ]tsɿnu panassu ...	日本語。
jampɿ]tu[nu ]panassu ...	病人。
janabja:]nɿ panas]su ...	非常に強い日差し。
janadzainɿ panas]su ...	ずるさ。
janajuminɿ panas]su ...	悪い嫁。
janaka:ginu panas]su ...	醜い容貌。
janami:nɿ panas]su ...	怖い目つきで見ること。
janammarinu panas]su ...	ブサイク。
janammarimununu panas]su ...	(顔の) 醜い人。
janasɿmtanɿ panas]su ...	根性が悪い。
janawa:tsɿ]kɿnu panassu ...	悪天候。
jaɿnu panas]su ...	銚。

jarabi]nu panassu ...	子供。
jaɣaminu panas]su ...	(建物の中に) 侵入する雨。
jarigɔ]nnu panassu ...	ボロボロになった服。
jarija:]nu panassu ...	古い家。
jaʂɔ]kɔnu panassu ...	屋敷。
jatsu]nu panassu ...	お灸 (きゅう)。
jav]vimununu panassu ...	怖い人。
jo:ba:]nu panassu ...	弱い人。
jo:dagama]nu panassu ...	病人。
jo:ɔnu panas]su ...	お祝い。
jo:ɔfo:nú ]panassu ...	宴。
jodzi]nu panassu ...	四時。
jondzu:]nu panassu ...	四十。
ju:]ga ma:sɔnu panassu ...	夜。
ju:nu panas]su ...	お湯。
juvdituna]kanu panassu ...	茹で卵。
ju:furu]nu panassu ...	お風呂。
ju:kanu panas]su ...	四日 (よっか)。
ju:ni:]nu panassu ...	重荷。
ju:ti:nu panas]su ...	四年。
ju:tsɔnu panas]su ...	四つ。
jubinú ]panassu ...	昨夜。
judanu panas]su ...	枝。
judaɔnu panas]su ...	涎。
judarjanu panas]su ...	涎をたらす人。
jugaina panas]su ...	冗談。
jugamaranu panas]su ...	歪んでいる男根。
jugami:nu panas]su ...	視線をそらすこと。
juganara:sɔnu panas]su ...	間違った教え。
jugurinú ]panassu ...	汚れ。
jukanu panas]su ...	床。
juka:ranu panas]su ...	側。
juka:raba]tanu panassu ...	脇腹。
jukabasɔnú ]panassu ...	敷居。
jukani:nu panas]su ...	床。
jukaranu panas]su ...	四匹。
jukivnu panas]su ...	四軒。

jukɫnu panas]su ...	斧。
jukunu panas]su ...	横。
juku:]nu panassu ...	休憩。
juku:nu panas]su ...	四個。
jumatanu panas]su ...	十字路。
juminu panas]su ...	嫁。
jumu]nanu panassu ...	鼠 (ネズミ)。
jumu]nunu panassu ...	鼠 (ネズミ)。
junainu panas]su ...	夜。
junakanu panas]su ...	夜中。
juna]panu panassu ...	与那覇 (よなは)。
juna]pafutsɫ[nu ]panassu ...	与那覇方言。
juna]pammarinu panassu ...	与那覇出身。
juni]kunu panassu ...	麦粉。
junugu:]nu panassu ...	同類。
jununakanu panas]su ...	世の中。
junu]sɫga panassu ...	ユヌス。
junutɫ]sɫ[nu ]panassu ...	同年性。
ju:pagimununu panas]su ...	いつ経っても成功しない人。
juppaɫ]nu panassu ...	小便。
juɫ]nu panassu ...	晩ご飯。
jurarimunu]nu panassu ...	風来坊。
jusara]bi[nu panassu ...	夕。
juta:ɫga panas]su ...	四人。
juvnu panas]su ...	粥。
ka:nu panas]su ...	井戸。
ka:nu panassu ...	皮。
ka:dzukunu panas]su ...	池。
ka:gi]nu panassu ...	容貌。
ka:m]tsɫnu panassu ...	川満 (かわみつ)。
ka:ra]nu panassu ...	瓦。
ka:]raja:nu panassu ...	瓦葺の家。
kabinu panas]su ...	壁。
kabɫnu panas]su ...	紙。
kabɫdʒinnu panas]su ...	後世のお金。
kabɫtuɫnu panas]su ...	凧。
kabutɕa]nu panassu ...	南瓜 (かぼちゃ)。

kəçi]:nu panassu ...	手伝い。
kadunu panas]su ...	角 (かど)。
kadzanu panas]su ...	匂い。
kadzammi]nu panassu ...	カザンミ。
kadza]mmipɔtu[nu ]panassu ...	カザンミ出身の人。
kadzınu panas]su ...	風。
kadzıfukɔnu panas]su ...	台風。
kadzıfukɔami]nu panassu ...	嵐。
kadzıma:ɔnu panassu ...	2月ごろの風。
kadzınu panas]su ...	数。
kəfutsɔnu panas]su ...	(屋敷内の) 菜園。
kagi]nu panassu ...	蔭。
kagıɔka]dzı[nu ]panassu ...	吉日。
kagıwa:tsɔ]kɔnu panassu ...	晴天。
kai]ga panassu ...	あれ。
kaita]ga panassu ...	あれら。
kajanu panas]su ...	茅。
kajo:binu panas]su ...	火曜日。
kəkɔ]nu panassu ...	垣。
kamnu panas]su ...	神。
kama]nu panassu ...	あそこ。
kamaba]kunu panassu ...	蒲鉾 (かまぼこ)。
kamata:]nu panassu ...	あそこら。
kamatsɔnu panas]su ...	頬。
kamda]nanu panassu ...	仏壇。
kami]nu panassu ...	甕 (かめ)。
kaminu panas]su ...	亀。
kamnıgo:mma]ga panassu ...	神役のおばあさん。
kamnu ɔo:ga]tsɔnu panassu ...	神の正月。
kamtı]tɔɔanu panas]su ...	占い師。
kannu panas]su ...	蟹。
kananu panas]su ...	鉋 (かんな)。
kanagai]nu panassu ...	先日。
kanamaɔ]nu panassu ...	頭。
kanamununu panas]su ...	金属製品。
kambo:nı panas]su ...	風邪。
kanınu panas]su ...	金 (かね)。

kanifugɲń́ panas]su ...	(金属でできている) 釘。
kanit]tsanu panassu ...	洲鎌にある集落名。
kan]ginu panassu ...	鬣 (たてがみ)。
kara]dzɲnu panassu ...	髪。
karajjuka]nu panassu ...	(縁側の) 床。
kara]su]nu panassu ...	麦が入っている味噌。
kari:nu panas]su ...	嘉例。
kariba:nu panas]su ...	枯れ葉。
kaɲma]tanu panassu ...	狩俣 (宮古島北部の集落)。
kąta]nu panassu ...	飛蝗 (ばった)。
kąta:]kinu panassu ...	責任。
kątaffu]nu panas]su ...	すき櫛。
kątabuɲ]nu panassu ...	片降り。
kąta]kanu panassu ...	(雨や風の) よけ。
kątakąɲń́ panas]su ...	魚の一種。
kątami:]nu panassu ...	片目。
kątamusɲ]nu panassu ...	肩。
kątamu]tanu panassu ...	傍ら。
kątana]nu panassu ...	包丁。
kątapąf]fanu panassu ...	障害を持つ子。
kątapagɲ]nu panassu ...	片足。
kątɕu:nu panas]su ...	鯉 (カツオ)。
ke:ro:ka]inu panassu ...	敬老会。
ki:nu panas]su ...	木。
ki:mimnu panas]su ...	茸 (きのこ)。
ki:satsɲnu panas]su ...	警察。
kidamunu]nu panassu ...	薪。
kidzɲnu panas]su ...	傷。
kiffunu panas]su ...	煙。
kina]nu panassu ...	玉杓子。
kinainu panas]su ...	家庭。
kindatinu panas]su ...	地鎮祭。
kinjo:binu panas]su ...	金曜日。
kjo:]tonu panassu ...	京都。
kjo:todaiga]kunu panassu ...	京都大学。
kju:]nu panassu ...	今日。
kju:dzu:]nu panassu ...	九十。

ko:nu panas]su ...	お香。
ko:dzɪnu panas]su ...	麴。
ko:ko]:nu panassu ...	高校。
ko:sokudo:]ronu panassu ...	高速道路。
ko:]sɪnu panassu ...	菓子。
kombi]ninu panassu ...	コンビに。
konçu:nu panas]su ...	今週。
kongetsɪnu panas]su ...	今月。
kɪmunu panas]su ...	心。
kɪmujan]nu panassu ...	心を痛めること。
kɪmukɸku]runu panassu ...	心。
kɪnnu panas]su ...	着物。
kɪnu]nu panassu ...	昨日。
kɪnubututu]ɲnu panassu ...	最近。
kssɪ:]nu panassu ...	煙管 (きせる)。
ku:ko:nu panas]su ...	空港。
ku:mu]janu panassu ...	ゴキブリ。
ku:ɲnu panas]su ...	部屋。
ku:ru]nu panassu ...	輪。
ku:]rugɪ:nu panassu ...	輪切り。
ku:sunu panas]su ...	唐辛子。
kubanu panas]su ...	びろう。
kubadzɪnu panas]su ...	釣瓶。
kubagi:nu panas]su ...	クバの木。
kubinu panas]su ...	(ススキで編まれた) 壁。
kubunu panas]su ...	瘤。
kudzɪ]nu panassu ...	九時。
kudzu]nu panassu ...	去年。
kuga]tsɪnu panassu ...	九月。
kui]nu panassu ...	声。
kui]ga panassu ...	これ。
kuita]ga panassu ...	これら。
kuitçɑ:]nu panassu ...	クイチャー。
kujunnu panas]su ...	暦。
kɸkunuka]nu panassu ...	九日 (ここのか)。
kɸkunuku:]nu panassu ...	九個。
kɸkunuti:]nu panassu ...	九年。

kʷkunu]tsɿnu panassu ...	九つ。
kuma]nu panassu ...	ここ。
kumata]:nu panassu ...	ここら。
kumunu panassu ...	雲。
kundunu panas]su ...	今度。
kunu]ɲnu panassu ...	最近。
kunkɿnu panas]su ...	体力。
kʷpa]rjanu panassu ...	どもり。
kʷpi]nnu panassu ...	瓶 (びん)。
kurumanu panas]su ...	車。
kurumanu panas]sʷ ...	車。
kʷsammi]nu panassu ...	背中。
kʷsɿnu panas]su ...	腰。
kʷsɿpuninu panas]su ...	背骨。
kʷtsɿ]nu panassu ...	靴。
kʷtsɿpagi]nu panassu ...	靴擦れ。
kʷtuba]nu panassu ...	言葉。
kʷtusɿnu panas]su ...	今年。
kuv]nu panassu ...	昆布。
kuvvanu panas]su ...	ふくらはぎ。
m:kanu panas]su ...	六日 (むいか)。
mmpu]rjazzunu panassu ...	魚の一種。
mti:nu panas]su ...	六年。
ma:]dʒaga mmnu panassu ...	芋の一種。
ma:]sunu panassu ...	塩。
madu]nu panassu ...	窓。
madʒɿmununu panas]su ...	幽霊。
maffanu panas]su ...	枕。
maffazzu]nu panassu ...	魚の一種。
magu]nu panassu ...	容器の一種。
magumimga panas]su ...	内側に反り返った耳。
mai]nu panassu ...	前。
maini]tsɿnu panassu ...	毎日。
majunu panas]su ...	眉毛。
majunu panas]su ...	猫。
maka]ɲnu panassu ...	椀。
makugan]nu panassu ...	ヤシガニ。

mama:ɽnu panas]su ...	周囲。
maminu panas]su ...	豆。
mamigi]:nu panassu ...	豆の木。
mamina:]nu panassu ...	モヤシ。
manatanu panas]su ...	蛙の一種。
manatçanu panas]su ...	俎板 (まないた)。
mandzu:]nu panassu ...	パパイヤ。
mandzu]:gi:nu panassu ...	パパイヤの木。
maninu panas]su ...	畝 (うね)。
manna]kanu panassu ...	真ん中。
maɽnu panas]su ...	米。
maranu panas]su ...	男性器。
maɽda:ranu panas]su ...	米俵。
maɽgo:sɽnu panas]su ...	米のお菓子。
maɽgu:nu panas]su ...	米の粉。
maɽnuɽ:nu panas]su ...	(ご飯の) お握り。
maɽtsɽbunu panas]su ...	米粒。
matsɽ]nu panassu ...	松。
matsɽgi:nu panas]su ...	睫毛。
matsɽgi:nu panas]su ...	松の木。
matsɽkani]nu panassu ...	マツカニ。
mattçanu panas]su ...	店。
mavgam]nu panassu ...	個人の守護神。
mafɽkja:nu panas]su ...	前。
mdzunu panas]su ...	溝。
mdzu]kunu panassu ...	溝。
mi:nu panas]su ...	目。
mi:bav]nu panassu ...	雌の蛇。
mi:da]tsɽmidumnu panassu ...	独身の女性。
mi:duɽ]nu panassu ...	雌鳥。
mi:gu:]nu panassu ...	穴埋め。
mi:iça]nu panassu ...	目医者。
mi:in]nu panassu ...	雌の犬。
mi:ja:]nu panassu ...	眼医者。
mi:maju]nu panassu ...	雌の猫。
mi:ni]tsɽnu panassu ...	命日。
mi:nu:]manu panassu ...	雌の馬。

mi:nu ka:]nu panassu ...	瞼 (まぶた)。
mi:pin]dzanu panas]su ...	雌の山羊。
mi:tsɿnu panas]su ...	三つ。
mi:usɿ]nu panassu ...	雌の牛。
midumnu panas]su ...	女性。
midumburja]nu panassu ...	(男性の) 浮気物。
midumbu]sɿnu panassu ...	女武士。
midumjara]binu panassu ...	女の子。
midumvva]nu panassu ...	娘。
midzɿnu panas]su ...	水。
midzɿaminu panas]su ...	水浴び。
miga]ga panassu ...	ミガ。
mimnu panas]su ...	茸 (きのこ)。
minnu panas]su ...	耳。
mimbani]nu panassu ...	びんた。
mimgami]nu panassu ...	取っ手の付いている甕 (かめ)。
mina]kanu panassu ...	庭。
minauibinu panas]su ...	小指。
min]nanu panassu ...	水納 (みんな)。
mintamanu panas]su ...	目玉。
mipana]nu panassu ...	顔。
misɿkina]nu panassu ...	杓文字。
mitsaɿga panas]su ...	三人。
mja:gun]nu panassu ...	宮国。
mja:kunu panas]su ...	宮古。
mja:kudzɿma = ]nu panassu ...	宮古島。
mja:kufɿtsɿ]nu panassu ...	宮古方言。
mja:kumtsu]nu panassu ...	宮古味噌。
mju:]ɿnu panassu ...	甥。
mju:]ɿvvanu panassu ...	甥。
mju:tunu panas]su ...	夫婦。
mju:turanu panas]su ...	夫婦。
mkadzɿnu panas]su ...	百足 (むかで)。
mkaranu panas]su ...	六匹。
mkivnu panas]su ...	六軒。
mmku:nu panas]su ...	六個。
mmnu panas]su ...	芋。

mma]ga panassu ...	祖母。
mmaba]ku[nu ]panassu ...	ばくろう。
mmaffa]nu panassu ...	親子 (母と子)。
mma]ganu panassu ...	孫。
mmanu]pa[nu ]panassu ...	南の方。
mmarinu panas]su ...	生まれ。
mmaridz]manu panas]su ...	故郷。
mmarijavnu panas]su ...	生まれ損なえ。
mmats]ma:ga panas]su ...	調子者。
m:batunu panas]su ...	鳩。
mbu]nu panassu ...	臍 (へそ)。
mmgama]tçaga panassu ...	福顔。
m:gi:nú ]panassu ...	芋づる。
mminu panas]su ...	胸。
mmifuts]nu panas]su ...	胸。
mm]naga panassu ...	皆。
mnnanu panas]su ...	蝸牛 (かたつむり)。
mmni]:nabinu panassu ...	芋用の大型鍋。
mmnu:]nu panassu ...	芋のお握り。
mmts]nu panas]su ...	六つ。
nnagu:nu panas]su ...	砂。
mnakanu panas]su ...	中央。
mokujo:binu panas]su ...	木曜日。
monore:]runu panassu ...	モノレール。
m]nu panas]su ...	(魚などの) 身。
m]juminu panas]su ...	新婦。
m]:kanu panas]su ...	三日 (みっか)。
m]:mju:turanu panas]su ...	新婚の夫婦。
m]:nanu panas]su ...	萑 (にら)。
m]ti:nu panas]su ...	三年。
m]:tina]ti[nu ]panassu ...	一昨年。
m]karanu panas]su ...	三匹。
m]kivnu panas]su ...	三軒。
m]ku:nu panas]su ...	三個。
m]matanu panas]su ...	三叉路 (さんさろ)。
mtanu panas]su ...	土。
mtabu]kinu panassu ...	土埃。

mtsɿ]nu panassu ...	道。
mtsɿ]sɿ[nu ]panassu ...	味噌汁。
mtsu]nu panassu ...	味噌。
mtsugami]nu panassu ...	味噌瓶。
mtu]bɿnu panassu ...	野苺。
mu:nnu panas]su ...	六回。
mudimunu]ɿnu panassu ...	ひねくれた言葉。
mudzɿfu]ɿnu panassu ...	作物。
mugɿnu panas]su ...	麦。
mujainu panas]su ...	模合。
muku]nu panassu ...	婿。
mun]nu panassu ...	桃。
mumuninu panas]su ...	腿 (もも)。
mununu panas]su ...	物。
munupana]sɿ[nu panassu ...	話 (はなし)。
munugu]:vnu panassu ...	料理のこしらえ。
munugu]tunu panassu ...	物事。
munuju]mjaga panassu ...	おしゃべりな人。
munuɿ]nu panassu ...	言葉。
musɿnu panas]su ...	虫。
mussunu panas]su ...	筵 (むしろ)。
mutinu panas]su ...	分。
mutsɿnu panas]su ...	餅。
mutsɿfɯsanu panas]su ...	草の一種。
mutu]nu panassu ...	木の株。
na:]ga panassu ...	自分。
na:nu panas]su ...	名前。
na:nu panas]su ...	菜 (な)。
na:dzu:nu panas]su ...	葉野菜。
naba]nu panassu ...	垢。
nabi]nu panassu ...	鍋。
nabja:]ranu panassu ...	糸瓜 (へちま)。
nadanu panas]su ...	涙。
nafusanu panas]su ...	砂利。
nagadi:]nu panassu ...	長い手。
nagafɯtsɿ]nu panassu ...	長い口。
nagajunu panas]su ...	ベラの仲間。

naga]manu panassu ...	長間 (ながま)。
nagamunu]nu panassu ...	長いもの。
nagannuts]nu panassu ...	長い命。
naganudu]nu panassu ...	細長い喉。
nagapa]g]nu panas[su ...	長い脚。
nagasa]nu panassu ...	長さ。
nagasamja:]nu panassu ...	長さ比べ。
nagasudi]nu panassu ...	長袖。
nagatçibi]nu panassu ...	長尻。
nagatsanu panas]su ...	翌日。
naginu panas]su ...	長さ。
naha]nu panassu ...	那覇。
nainu panas]su ...	地震。
naimm]nu panassu ...	萎えた芋。
najamgu]tunu panassu ...	悩み事。
naka]nu panassu ...	中。
naka]minu panassu ...	(豚の) 内蔵。
namnu panas]su ...	波。
namadangak]nu panas]su ...	怠け者。
namas]nu panas]su ...	刺身。
namts]k]nu panassu ...	焦げ。
nanadzũ:]nu panassu ...	七十。
nanakara]nu panassu ...	七匹。
nanaku]:nu panassu ...	七個。
nanati]:nu panassu ...	七年。
nana]ts]nu panassu ...	七つ。
nannjo:mm]nanu panassu ...	南洋蝸牛。
nanğ]nu panas]su ...	苦勞。
nankanu panas]su ...	七日 (なのか)。
nanko]:nu panassu ...	南瓜 (かぼちゃ)。
na]danu panassu ...	肉垂れ。
na]ğ]p]tunu panas]su ...	びっこ。
nas]kçea]nu panassu ...	末っ子。
nas]kç]çaffanu panassu ...	末っ子。
nats]nu panas]su ...	夏。
ndubo:dz]nu panas]su ...	雲丹 (うに)。
ndza]nu panassuga ...	どこ。

ndzandza]nu panassuba[: ...	どこそこ。
ndzata:]nu panassuga ...	どころ。
ndzi]nu panassuga ...	どれ。
ni:]nu panassu ...	荷。
ni:nu panas]su ...	根。
ni:nivnú ]panassu ...	居眠り。
niba]nu panas]su ...	(張っている) 根っこ。
nibu]tanu panassu ...	できもの。
nidzi]nu panassu ...	二時。
nidzu:nu panas]su ...	二十。
niga]ts]nu panassu ...	二月。
nigo]:nu panassu ...	二号。
ninnú ]panassu ...	趣味。
ninupa]nu panassu ...	北方。
ningi]nnu panassu ...	人間。
ningi]nnu ɕo:gats]nu panassu ...	人間の正月。
nink]nu panas]su ...	年忌。
nis]nu panas]su ...	北。
nitɕijo:binu panas]su ...	日曜日。
nits]nu panas]su ...	(病気による) 熱。
nja:]binu panassu ...	真似。
nna:]nu panas]su ...	皆愛 (みなあい)。
nna:]mma]rinu panassu ...	皆愛出身。
nnama]nu panassu ...	今。
nna]magatanu panassu ...	さっき。
nnam:]ti[nu ]panassu ...	再来年。
nnap]ka]nu panassu ...	稲光。
nnats]dz]nu panassu ...	頭のとっぺん。
nnja]nu panassu ...	大変なこと。
nnu]ts]nu panassu ...	命。
no:]nu panassu[ga ...ga	何。
nu:nu panas]su ...	野。
nu:manu panas]su ...	馬。
nu:madzu]:nu panassu ...	馬の料理、馬肉。
nubari]nu panassu ...	野原。
nuba]rip]tunu panassu ...	野原 (のぼり) 出身の人。
nub:]nu panassu ...	野蒜 (のびる)。

nubu]inu panassu ...	首。
nudunu panas]su ...	喉。
nudza]k]nu panassu ...	久松。
nuku]g]nu panassu ...	鋸 (のこぎり)。
nukʉs]munu]nu panassu ...	残し物。
num]nu panassu ...	蚤。
nununu panas]su ...	布。
nus]nu panassu ...	主。
nus]tunu panas]su ...	泥棒。
nu:z̥z̥u:]nu panassu ...	(裁縫用の) 糸。
nginu panas]su ...	アダンの木。
ngibas]n̄ ]panassu ...	アダンでできた戸。
ngja]nanu panassu ...	にが菜。
ng]nu panassu ...	右。
ng]nu panassu ...	(皮膚の中に刺さっている) 棘。
ng]di:nu panas]su ...	右手。
nkja:n̄nu panas]su ...	昔。
nkja:n̄bana]s]nu ]panassu ...	昔話。
nkja:n̄p]tunu panas]su ...	昔の人。
nkja]funu panassu ...	海葡萄。
nk]nu panas]su ...	お神酒。
nk]banan̄ ]panassu ...	軒下。
nk]m̄nu panas]su ...	ニキビ。
o:ba]nu panas]su ...	金蠅。
o:da]nu panassu ...	(草などを入れる) 容器の一種。
o:]g]nu panassu ...	扇。
o:ja:]nu panassu ...	喧嘩。
o:nabanu panas]su ...	苔。
pa:nu panas]su ...	歯。
pa:nu panas]su ...	刃。
pa:nu panas]su ...	葉。
pa:dzu:]nu panassu ...	葉物野菜。
pa:garanu panas]su ...	枯葉。
pa:iça]nu panassu ...	歯医者。
pa:ja:]nu panassu ...	歯医者。
pa:m̄manu panas]su ...	年を取ったおばあさん。
pa:n]tunu panassu ...	醜い面。

pa:sɽ:]sɽnu panassu ...	齒莖。
padaka]nu panas[su ...	肌が見えている状態。
pada]razzunu panassu ...	鱗。
padzɽminu panas]su ...	始め。
pagama]nu panassu ...	羽釜。
pagiganamarja]nu panassu ...	禿げた頭。
pagɽ]nu panassu ...	足。
pagɽbzza]nu panassu ...	くるぶしばね以下の部分。
paikadzɽinu panas]su ...	南風。
pəkanu panas]su ...	墓。
pəku]nu panassu ...	箱。
pama]nu panassu ...	浜。
pambi]nnu panassu ...	天ぷら。
pammainu panas]su ...	飯米。
pananu panas]su ...	鼻。
panadzɽinu panas]su ...	鼻の先。
panapɽginu panas]su ...	鼻毛。
panatssɽnu panas[su ...	鼻血。
paninu panas]su ...	羽 (はね)。
panigaɽ]nu panassu ...	鱭 (ひれ)。
paɽnu panas]su ...	蠅 (ハエ)。
para]nu panassu ...	柱。
paramnu panas]su ...	卵巣。
paɽ]dinu panassu ...	出ること。
paɽdivvanu panas]su ...	分家の子。
pari]nu panassu ...	畑。
parija:]nu panassu ...	農夫。
parimtsɽ]nu panassu ...	田舎の道。
parisɽgu]tunu panassu ...	畑仕事。
parisɽkama]nu panassu ...	畑仕事。
pəsa]mnu panassu ...	鋏。
pəsoko]nnu panassu ...	パソコン。
pəsɽ]nu panas]su ...	橋。
pətanu panas]su ...	(グラス、器などの) 縁。
pəta]tsɽnu panassu ...	二十歳。
pətsɽnu panas]su ...	蜂。
patsɽkanu panas]su ...	二十日 (はつか)。

pəʔtunu panas]su ...	鳩。
pavnu panas]su ...	蛇。
pi:nu panas]su ...	屁。
pi:pçça]nu panassu ...	屁こき屋。
pssi]nu panassu ...	珊瑚礁。
pssinnnanu panas]su ...	サザエ。
pin]dzanu panassu ...	山羊 (やぎ)。
pinnapʔtunu panas]su ...?	変人。
pira]nu panassu ...	篋 (へら)。
pʔti:]tsʔnu panassu ...	一つ。
pja:kunu panas]su ...	百。
pja:ʔnu panas]su ...	日差し。
pja:rinu panas]su ...	旱魃。
pja:rimununu panas]su ...	間食。
po:]kʔnu panassu ...	箒。
pʔ:]nu panassu ...	針。
pʔ:nu panas]su ...	大蒜 (にんにく)。
pʔ:tsʔkʔ]nu panassu ...	刺青 (いれずみ)。
pʔda]ʔnu panassu ...	左。
pʔda]rjanu panassu ...	左利き。
pʔdaʔdi:nu panas]su ...	左手。
pʔdzʔnu panas]su ...	肘。
pʔginu panas]su ...	髭 (ひげ)。
pʔgimuça]nu panassu ...	毛むくじゃら。
pʔgimun]nu panassu ...	桃の一種。
pʔkadzʔnu panas]su ...	日。
pʔkaʔmunu]nu panassu ...	光るもの。
pʔkʔninnu panas]su ...	人間と見なされていない人。
pʔmʔkʔnu panas]su ...	喘息。
pssanu panas]su ...	足の足首以下の部分。
pssaganu panas]su ...	裸。
pssakitanu panas]su ...	洗濯板。
pssapambinnu panas]su ...	宮古島のクレープ。
pssaranu panas]su ...	平良。
pssarafʔtsʔnu panas]su ...	平良方言。
pssʔnu panas]su ...	女性器。
pssʔmanu panas]su ...	昼。

pɯ̌tunu panas]su ...	人。
pɯ̌tuka]ranu panassu ...	一匹。
pɯ̌tukiv]nu panassu ...	一軒。
pɯ̌tuku:]nu panassu ...	一個。
pɯ̌tun]nu panassu ...	一回。
pɯ̌tuɿ]nu panassu ...	一日 (いちにち)。
pɯ̌tuti:]nu panassu ...	一年。
pu:]nu panassu ...	帆。
pu:ɿnu panas]su ...	五穀の祭り。
puinu panas]su ...	大きさ。
pɯ̌karassanu panas]su ...	嬉しさ。
pɯ̌kinu panas]su ...	埃。
pundainu panas]su ...	わがまま。
puni]nu panassu ...	骨。
purimununu panas]su ...	馬鹿 (な人)。
pɯ̌sɿnu panas]su ...	星。
ɿ:nu panas]su ...	西。
ɿ:dinnu panas]su ...	西の空。
ɿ:kɿnu panas]su ...	鱗。
ɿ:mukunu panas]su ...	入り婿。
ɿ:nja:]nu panassu ...	西隣の家。
ɿ:sanu panas]su ...	唾 (おし)。
ɿ:tsɿmma:]nu panassu ...	西積間。
radzi]onu panassu ...	ラジオ。
raiçu:nu panas]su ...	来週。
raigetsɿnu panas]su ...	来月。
ɿbɿnu panas]su ...	伊勢海老。
ɿbɿgan]nu panassu ...	伊勢海老。
re:dzo:]konu panassu ...	冷蔵庫。
ɿkɿ]nu panassu ...	息。
roku]džinu panassu ...	六時。
rokudžu:]nu panassu ...	六十。
rokuga]tsɿnu panassu ...	六月。
zzakunu panas]su ...	櫛 (かい)。
zzaɿnu panas]su ...	胞衣 (えな)。
zzara]nu panassu ...	鎌 (かま)。
zzunu panas]su ...	魚。

zzunu mi:nu panas]su ...	魚の目。
zzutssɲnǐ panas]su ...	魚釣り。
zzuturjanu panas]su ...	漁師。
sa:]ruga panassu ...	蠮螋 (かまきり)。
saba]nu panassu ...	草履。
sabaninu panas]su ...	くり船。
sadz]nu panassu ...	タオル。
sajafunu panas]su ...	大工。
sąkanu panas]su ...	坂。
sąkamanu panas[su ...	坂。
sakamamtsɲnǐ ]panassu ...	坂道。
sąkamtsɲnu panas]su ...	坂道。
sąkinu panas]su ...	酒。
sąkifajanu panas]su ...	毎日酒を飲む人。
sąkigaminu panas]su ...	酒瓶。
sąkinumnu panas]su ...	飲み会。
sąkinumjanu panas]su ...	酒をたくさん飲む人。
sąkɔduminu panas]su ...	先妻。
samu]nu panas[su ...	遊びの一種。
sana]nu panassu ...	傘。
sana]gɲnu panassu ...	禪。
sana]kanu panassu ...	朝十時の休憩。
sançinnu panas]su ...	三味線。
sandzi]nu panassu ...	三時。
sandzu:]nu panassu ...	三十。
saninu panas]su ...	種。
saninnu panas]su ...	月桃。
sanitsɲnu panas]su ...	宮古島の祭りの一つ。
saniwa:]nu panassu ...	種付け用の雄豚。
sanminnu panas]su ...	判断。
sanga]tsɲnu panassu ...	三月。
sa]nu panas[su ...	海老 (えび)。
saranu panas]su ...	皿。
sa]gama]nu panassu ...	海老 (えび)。
sarizzunu panas]su ...	干魚。
sa]nu]panu panassu ...	西方。
saruka]nu panassu ...	サルカケミカン。

sarukajama]nu panassu ...	サルカケミカンの林。
sasab]nu panas[su ...	しゃっくり。
sasa]ginu panassu ...	結婚。
sata]nu panassu ...	砂糖。
senču:nu panas]su ...	先週。
senmongakko]:nu panassu ...	専門学校。
sengets]nu panas]su ...	先月。
s]b]nu panassu ...	貝の一種。
so:nu panas]su ...	竿。
so:]dz]nu panassu ...	掃除。
so:]kanu panassu ...	生姜 (しょうが)。
so:]kinu panassu ...	(野菜や芋などを入れる) 籠の一種。
so:mi]nnu panassu ...	素麺。
so:]minbutturanu panassu ...	素麺チャンプル。
s]:nu panassu ...	お酢。
s]:s]nu panas]su ...	(油と対照的に) 肉。
s]:s]wa:]nu panassu ...	赤身の多い豚。
s]banu panas]su ...	唇。
s]danu panas]su ...	舌。
s]digara]nu panassu ...	抜け殻。
s]digu:]nu panassu ...	抜け殻。
s]diguru]nu panassu ...	抜け殻。
s]dimm]nu panassu ...	水っぽくなった芋。
s]dz]nu panas]su ...	茎。
s]ga]manu panassu ...	洲鎌 (すがま)。
s]gutunu panas]su ...	仕事。
s]ijo:binu panas]su ...	水曜日。
s]kama]nu panassu ...	仕事。
s]k]:nu panas]su ...	海鼠 (なまこ)。
s]manu panas]su ...	島。
s]manu panas]su ...	相撲。
s]madz]:nu panassu ...	島尻 (しまじり)。
s]mafuts]nu panassu ...	方言。
s]mamtsu]nu panassu ...	島味噌。
s]maturjanu panas]su ...	相撲取り。
s]mbju:nu panas]su ...	泥酔する。
s]mnanu panas]su ...	葱 (ねぎ)。

ɣnu]nu panassu ...	もずく。
ɣpɣimunu panas]su ...	耳が聞こえなくなっている人。
sɣpug]nu panas]su ...	帯。
ɣtanu panas]su ...	下。
ɣta:ranu panas]su ...	下、下の方。
ɣtaba:nu panas]su ...	(サトウキビの) 下部の葉っぱ。
ɣta]sanu panassu ...	舅 (しゅうと)。
ɣtsɣdzan]nu panassu ...	放置。
ɣtugats]nu panassu ...	お盆。
ɣtu]manu panassu ...	姑 (しゅうとめ)。
ɣtumu]tinu panas]su ...	朝。
ɣv]nu panassu ...	冬瓜。
ssa]mnu panassu ...	虱。
ssa]nu panassu ...	白蟻。
ssa]rinu panassu ...	発情。
ss]nu panassu ...	巣。
su:nu panas]su ...	野菜。
subanu panas]su ...	蕎麦 (そば)。
subanu panas]su ...	側。
sudinu panas]su ...	袖。
sudzanu panas]su ...	兄。
sudzassunu panas]su ...	年上。
sɣkunu panas]su ...	底。
sunnu panas]su ...	損。
sura]nu panassu ...	茎や枝の先端。
ɣuri]nu panassu ...	首里 (しゅり)。
sɣti]tsɣnu panassu ...	蘇鉄 (そてつ)。
ta:]ga panassuga ...	誰。
ta:nu panas]su ...	田。
ta:ma]nu panas]su ...	田米。
ta:mmnanu panas]su ...	蝸牛の一種。
ta:ranu panas]su ...	俵。
tab]nu panas]su ...	旅。
tagu]nu panassu ...	桶。
tai]raga panassu ...	平良 (たいら)。
taja]nu panassu ...	力。
tajamunu panas]su ...	力持ち。

təkanu panas]su ...	鷓 (さしば)。
təkamm]nanu panassu ...	高瀬貝。
təkaranu panas]su ...	宝。
təkaramunu]nu panassu ...	宝物。
təkinu panas]su ...	竹。
təkʲbo:kʲnu panas]su ...	竹箒。
təkiburaní panas]su ...	竹の笛。
təkunu panas]su ...	蛸 (たこ)。
tamanu panas]su ...	分。
tamanu panas]su ...	玉。
tamannu panas]su ...	魚の一種 (ふえふき)。
tamana:]nu panassu ...	キャベツ。
tama]sʲnu panassu ...	魂。
tamatsʲkʲpʲ]tunu panassu ...	癩癩。
tamu]nunu panassu ...	薪。
tanani:nu panas]su ...	洲鎌にある集落名。
tan]dinu panassu ...	お詫び。
taninu panas]su ...	種。
tani]kunu panassu ...	塊。
taʲnu panas]su ...	松明 (たいまつ)。
tarakinu panas]su ...	世代。
tara]manu panassu ...	多良間。
taramadzʲma = ]nu panassu ...	多良間島。
tara]mafʲtsʲnu panassu ...	多良間方言。
tara]ʲnu panassu ...	盥。
təʲʃkaran munu]nu panassu ...	駄目な人。
tətatsʲkʲ]nu panassu ...	来月。
tətəo]:nu panassu ...	仏壇に (お茶を) 供えること。
tətʲʲnu panas]su ...	(家畜の) 小屋。
tətʲbʲ]:nu panassu ...	座る姿勢と立つ姿勢の間の姿勢。
təa:nu panas]su ...	お茶。
təaba]nnu panassu ...	茶碗。
təi:ga:]nu panassu ...	聾啞者 (ろうあしゃ)。
təibinu panas]su ...	尻。
təibirunnu panas]su ...	肛門。
təikina:nu panas]su ...	野菜の漬物。
təirudainu panas]su ...	大型の膳。

t̚o:]kinu panassu ...	(お茶の) つまみ。
t̚o: minnu panas]su ...	帳面。
t̚u:gakko]:nu panassu ...	中学校。
t̚u:]kanu panassu ...	急須。
te:buru]nu panassu ...	テーブル。
tere]nu panassu ...	テレビ。
ti:nu panas]su ...	手。
ti:ts̚m]nu panassu ...	拳。
tida]nu panassu ...	太陽。
tidań ]utibana[nu ]panas[su ...	太陽の落ちるごろ。
tiga:]ranu panassu ...	塊。
tigara]nu panassu ...	自慢。
tima:]nu panassu ...	給料。
timbavnu panas]su ...	虹。
tinnu panas]su ...	空。
tindzo:]nu panassu ...	天井。
tiradzanu panas]su ...	巻貝。
to:]ga panassuga ...	誰。
to:]funu panassu ...	豆腐。
to:]fũk̚ʂ̚ganamarjanu panassu ...	豆腐粕頭。
to:kjo:nu panas]su ...	東京。
to:kjo:daiga]kunu panassu ...	東京大学。
to:]taga panassuga ...	誰ら。
to:]vanu panassu ...	台所。
tomo]riga panassu ...	友利 (ともり)。
ts̚:]g̚nu panas]su ...	棘。
ts̚:]k̚nu panas]su ...	血炒め。
ts̚]dani]nu panassu ...	乳首のしこり。
ts̚]dz̚nu panas]su ...	てっぺん。
ts̚]gus̚nu panas]su ...	膝。
ts̚]kasanu panas]su ...	司。
ts̚]kasammanu panas]su ...	司。
ts̚]kimununu panas]su ...	漬物。
ts̚]k̚nu panas]su ...	(天体の) 月。
ts̚]minu panas]su ...	爪。
ts̚]nanu panas]su ...	綱。
ts̚]mfugunu panas]su ...	積窪。

tsɯnunu panas]su ...	角 (つの)。
tssɯnu panas]su ...	乳。
tssɯfutsɯ]nu panassu ...	乳首。
tsɯtu]nu panas[su ...	お土産。
tu:nu panas]su ...	十。
tu:]dzɯnu panassu ...	手水。
tu:dzɯgani]nu panassu ...	洗面器。
tu:futa:tsɯnu panas]su ...	十二。
tu:itsɯtsɯnu panas]su ...	十五。
tu:ja:tsɯnu panas]su ...	十八。
tu:ju:tsɯnu panas]su ...	十四。
tu:kɯkunutsɯnu panas]su ...	十九。
tu:mmtsɯnu panas]su ...	十六。
tu:mi:tsɯnu panas]su ...	十三。
tu:nanatsɯnu panas]su ...	十七。
tu:pɯti:tsɯnu panas]su ...	十一。
tudzɯnu panas]su ...	妻。
tudzɯmi]nu panassu ...	終り。
tuinu panas]su ...	干支。
tɯkanu panas]su ...	十日 (とおか)。
tɯkafutsɯkanu panas]su ...	十二日 (じゅうにち)。
tɯkaitsɯkanu panas]su ...	十五日 (じゅうごにち)。
tɯkajo:]kanu panassu ...	十八日 (じゅうはちにち)。
tɯkaju:kanu panas]su ...	十四日 (じゅうよっか)。
tɯkammkanu panas]su ...	十六日 (じゅうろくにち)。
tɯkamɯ:kanu panas]su ...	十三日 (じゅうさんにち)。
tɯkanan]kanu panassu ...	十七日 (じゅうしちにち)。
tɯkaranu panas]su ...	十匹。
tɯkɯnu panas]su ...	占い師。
tɯku:nu panas]su ...	十個。
tumu]ɯnu panassu ...	友利。
tuna]kanu panassu ...	卵。
tunaɯnu panas]su ...	隣。
tunara]nu panassu ...	秋の野芥子。
tunubarja[ga panas]su ...	ぼうっとする人。
tungaranu panas]su ...	(女性の) 同級生。
tuɯnu panas]su ...	鳥。

turanupanu panas]su ...	東方。
turipɣuɣnu panas]su ...	冬の時期に風がなくて冷たいこと。
tɯmi:nu panas]su ...	鳥目。
tɯnu ssɿ]nu panassu ...	鳥の巣。
tɯɣnu panas]su ...	年。
tɯtannu panas]su ...	トタン。
tɯtanganinu panas]su ...	トタン。
tɯtanganija:]nu panassu ...	トタン屋根の家。
tɯti:nu panas]su ...	十年。
tɯtubaripin]dzanu panassu ...	ぼんやりとした山羊。
vdamununu panas]su ...	太っている人。
udawa:nu panas]su ...	(比喩的に) デブ。
udinu panas]su ...	腕。
udzɿnu panas]su ...	ウツボ。
udzɿmba]raja:nu panassu ...	掘立柱建物。
ue]tɕiga panassu ...	上地 (うえち)。
ugam]nu panassu ...	大神。
ugamdɣma]nu panassu ...	大神島。
ui]ga panassu ...	それ。
uibi]nu panassu ...	指。
uibigani]nu panassu ...	指輪。
uidzɿnu panas]su ...	上地 (うえち)。
uiɣtunu panas]su ...	年寄り。
uisanu panas]su ...	噂。
uita]ga panassu ...	それら。
uja]ga panassu ...	父。
ujaffa]nu panassu ...	親子。
uja]kimununu panassu ...	富裕な人。
uja]kiɣtu:nu panassu ...	金持ち。
ujamma]ga panassu ...	両親。
ukka]nu panassu ...	借金。
ukɿna:]nu panassu ...	沖縄。
uma]nu panassu ...	そこ。
umata:]nu panassu ...	そこら。
uma]tsɿnu panassu ...	火。
umujas]sanu panassu ...	安心。
umuku]tunu panassu ...	知恵。

una]gɽnu panassu ...	鰻 (うなぎ)。
undo:ka]inu panassu ...	運動会。
unu tu]sɽnu panassu ...	その年。
ungɽ]nu panassu ...	恩。
upa:]dzaga panassu ...	長男。
upuba:]kinu panassu ...	大きい箆。
upubari]nu panassu ...	大きい畑。
upɸo:ga]tsɽnu panassu ...	大正月。
upuduɽ]nu panassu ...	大鳥。
upudzin]nu panassu ...	大善。
upudzɽ:]nu panassu ...	巨乳。
upɸfɸku]nu panassu ...	大きい服。
upugi:]nu panassu ...	大きな木。
upukuru]manu panassu ...	大きな車。
upuiɸa]nu panassu ...	偉い医者。
upuin]nu panassu ...	大きな犬。
upuis]ɽnu panassu ...	大きな椅子。
upuis]nu panassu ...	大石。
upuja:]nu panassu ...	大きな家。
upɸka:]nu panassu ...	大きな井戸。
upukagam]nu panassu ...	大きな鏡。
upɸkɸtsɽ]nu panassu ...	大きな靴。
upumaju]nu panassu ...	大きな猫。
upumami]nu panassu ...	大きな豆。
upumi:]nu panassu ...	大きな目を持つ (こと、人)。
upumin]nu panassu ...	大きな耳。
upumju:tura]nu panassu ...	大きな夫婦。
upum]tsɽnu panassu ...	大道。
upumusɽ]nu panassu ...	大きな虫。
upuna:nu panas]su ...	洲鎌にある集落名。
upunabi]nu panassu ...	大きな鍋。
upuni]nu panassu ...	大根。
upuntu]nu panassu ...	体が大きい。
upunu:ma]nu panassu ...	大きな馬。
upuo:]gɽnu panassu ...	大きな扇。
upɸpav]nu panassu ...	大蛇。
upɸpindza]nu panassu ...	大きな山羊。

upupɔ̃tu]nu panassu ...	大人。
upusanagɔ̃]nu panassu ...	大きな禪。
upusɔ̃ma]nu panassu ...	大きな島。
upɔ̃su]nu panassu ...	海水。
upuusɔ̃]nu panassu ...	大きな牛。
upuwa:]nu panassu ...	大きな豚。
uɔ̃]nu panassu ...	瓜。
ura]dzanu panassu ...	裏座 (伝統的な間取りでは奥の部屋)。
uɔ̃gama]nu panassu ...	赤毛瓜 (あかげうり)。
uru]kanu panassu ...	砂川 (うるか、城辺の集落)。
urukaɔ̃fɔ̃]tsɔ̃nu panassu ...	砂川方言。
usainu panas]su ...	肴。
usɔ̃nu panas]su ...	牛。
ussunu panas]su ...	後頭部。
utɔ̃ki]nu panassu ...	御嶽。
utɔ̃an]nu panassu ...	投網 (とあみ)。
utsudza]nu panassu ...	親戚。
utunu panas]su ...	音。
utu:]nu panassu ...	お通り。
utugaɔ̃]nu panassu ...	顎 (あご)。
utɔ̃tunu panas]su ...	年下のきょうだい。
wa:]bunu panas]su ...	上。
wa:]ɔ̃a:]nu panas]su ...	豚をつぶし、売ることを職業とする人。
wa:]kɔ̃nanu panas]su ...	態度が悪い。
wa:]nu ja:]nu panassu ...	豚小屋。
wa:]padanu panas]su ...	表面。
wa:]ranu panas]su ...	上。
watɔ̃ɔ̃]kunu panassu ...	悪戯。
wa:]tsɔ̃kɔ̃]nu panas]su ...	天気。
vva]ga panassu ...	君。
vva]taga panassu ...	君たち。
wa:]nu panassu ...	輪。
zzigaranu panas]su ...	入れ髪。
zzimununu panas]su ...	入れ物。